

# 高校・大学生のための

---

# 考える福祉



「火炎放射器付き車椅子」なら？ (本誌27ページ)

**住民流福祉総合研究所 (木原孝久)**  
〒埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷1476-1  
電話049 (294) 8284

# 本書のねらい

---

本書は高校・大学生のための「考える福祉」入門書である。福祉入門と言うと、いろいろな福祉関連制度の解説と間違われるので、「考える」と題することにした。

専門学校や福祉系の大学を卒業すると、そのまま福祉の現場に入る人が多いだろう。そうなったら、何も考えなくても、仕事は自動的に進んでいく。そこで働くことが、即福祉に関わることだから、今更「福祉とは何ぞや」などと自分に問いかける必要はなくなる。

ヘルパーやケアマネジャー、福祉施設の職員などに講義をしていて痛感するのは、こういう原論的な話をどの講師もしていないし、受講生の多くも望んでいないということだ。私は敢えて原論をぶつけるのだが、「そんな話よりも、早く技術を教えてほしい」となる。

だが、今の福祉をそのまま、自明のことと認めてしまっているのか。一度立ち止まって考えてみれば、疑問が生じるはずなのだ。一般のビジネス社会なら、それでもいいかもしれないが、こちらは人の命を預かる仕事である。そのやり方次第では、相手に多少の不利益を与える可能性もあるのだ。もっともって考えていい。

といっても、実際に仕事が始まってからは、自分の携わっている業務について、あれこれ疑いの目を向けることもあるまいと思うのが普通だろう。そこで、まだ現場に入っていない学生の間だけでも、原論的な思考を体験してもいいのではないかな。そういう思いで、本書をまとめたのである。

今の大学生や高校生にもわかるように、といった配慮は一つもしていない。難しいと思った時は、その箇所は飛ばして、次へ進んで結構である。少なくとも、深く考える題材だけは、たくさん用意してある。

これで満足できず、もっと深く、もっと具体的に、もっと詳細に知りたいときは、本研究所のホームページを開いていただきたい。70数種類の冊子がすべて、ダウンロードできるようにしてある。

# 目次

---

## ＜序章＞福祉とは、人間を大事にすることだった／5

### ＜第1章＞「自分を大事に」から始めよう／7

1. 「人を大事にする」と「自分を大事にする」は一体だった／7
2. 「身を守る力」が弱い！／8
3. 「自助力」とは助けられ上手のこと／9
4. 「助けられ」は、もう一つの福祉活動／11
5. 「助けられ上手」のコツとは？／13
6. 「助けられ上手さん」はどんな人？／15
7. 身を守りたいならプライバシーは放棄／16
8. 「自分事」から「他人事」へ／17

### ＜第2章＞誰を大事にするのか？／19

1. 「悪い人」ではなく「人間らしく生きるのを阻まれた人」／19
2. どんなに重い要介護でも大事に／23

### ＜第3章＞人をどのように大事にするのか？／26

1. 誇りをつぶさない支援／26
2. 障害は才能だった—本人の能力を引き出す／32
3. 仲間に加える—共生社会づくりへのハードル／35
4. ミエミエでやってくれるな—福祉は水面下で／41

## ＜第4章＞助け合いは両刀遣いで免許皆伝／46

- 1.助け合いはなぜ難しい？／46
- 2.助けられ手見ると分かってくること／47
- 3.助け合いはしない「日本のおつき合い」／50
- 4.日本社会に助け合いを起こすには？／53

## ＜第5章＞当事者を主役に据える／54

- 1.推進者や担い手が主導する福祉／54
- 2.「ご近所」だけは当事者が主導／57
- 3.第1層と第4層のたたかい／59
- 4.当事者が動き始めた／61

## ＜終章＞反文明への回帰／64

※本書の全体の執筆者は木原孝久だが、以下の記事は木原理恵が執筆。

- (1)連続殺人犯と企業の重役は酷似していた／20
- (2)元麻薬の売人が企業のトップセールスマンに／22
- (3)火炎放射器付き車椅子だぞ！／27
- (4)アートを履いて有利に立つ―義足のファッションモデル／28
- (5)「福祉の店」が超高級化した時／29
- (6)イスラエル軍で自閉症者たちが担っている任務とは？／33
- (7)わが子を殺した犯人もコミュニティに受け入れ／36
- (8)息子を殺した犯人を隣人に迎え入れ／39

## <序章>

---

# 福祉とは、人間を 大事にすることだった

## ■「人間を大事に」から、むしろ遠ざかる現状

本書は「福祉原論」—福祉とは何なのかをストレートに考える、という意味での「原論」である。初めにお断りしておくが、本書ではかなり厳しいことも、敢えて述べている。根本的に福祉というものを考えるためには、どうしても必要なことからである。

この「原論」を、「人間を大事にする」という単純素朴なキーワードから始めることにした。文明の発達した現代で、いまさら「人間を大事にする」とは、どういうことかと不審に思われるだろう。

今、福祉の専門機関が、要援護者をどのように遇しているだろうか。ケアマネジャーがケアプランを立てるが、その内容といえば、ヘルパーを派遣し、デイサービスを利用させ、最後は施設に入所させるのが基本だ。つまり相手を障害や要介護度で分けて、ひとまとめにして、十把ひとからげのサービスを提供したり、施設に収容する。果たして、これが真に「人間を大事にする」扱いと言えるだろうか。

文明のおかげで、たしかに生活は便利になったけれど、同様に人への扱い方もやりやすく、便利で、効率的にできるようになった。それは効率化することによって、人を大事にするのとは反対方向に向かっていると見ることもできる。むしろ、人間を粗雑に扱うことになっているのではないかと疑われる。

## ■「当事者本意」とはこう処遇すること

人間を大事にするとは、具体的には当事者（要援護者）を大事にするということ、突き詰めれば、当事者本意で福祉を考えるということになる。当事者の側から福祉のあり方を考える、つまり当事者主体だ。

当事者主体なんて、とっくに実現していると業界関係者は言う。しかしこれは大きな誤解で、先ほど説明した、担い手にとってやりやすい、便利で、効率的な福祉とは、担い手に都合の良いような福祉、つまり担い手主導の福祉と言っているのと同じである。この手法を使えば使うほど、当事者主体から離れていく。

例えば本書の「人間をどのように大事にするのか」という章がある。当事者本意で考えればこうなるということだが、当事者が本当に願っていることと今の福祉は、かなり隔たっているのである。

## ■住み慣れた地域で自分らしく生きていけるように

担い手にとってやりやすい（効率的な）福祉は、本来は当事者にとっては不都合なサービスであるはずなのに、当事者がこれに適応するようになってきているのが特に気になる点だ。デイサービスは嫌だと言っていたのに、だんだん心地よくなり、「もう一日増やしたい」となる。施設入所に抵抗していたのに、いつの間にか「楽だ」と思うようになる。

一方で、これを拒否する人もいる。ケアマネジャーの知人から聞いたのだが、担当した女性が超高級な施設に入所したのに、最近になって「施設は私が私らしく生きていくのに向いていないから、ここを出たい」と言い出したというのだ。

この言葉は、じつは厚労省が福祉の目的を定義したのと同じである。「どんなに重い要介護になっても、住み慣れた地域で自分らしく生きていけるように」支援しましょうというのである。この基準を当てはめたら、今の福祉はすべて失格と言われそうだ。

福祉はまだ、最終地点に来ているわけではない。むしろ退歩しているようにさえ見える。とにかく前進するためには、厚労省の言葉を踏まえて、原点に帰り、そこから見直していく必要があるのだ。

## <第1章>

---

# 「自分を大事に」から 始めよう

人を大事にしようという場合、最も大切なのは、まず自分自身を大事にしようということである。福祉とは、ここから始まるのだ。「福祉の心」とは、だから自分自身を大事にしようという心掛けのことだと言ってもいい。

## 1.「人を大事にする」と 「自分を大事にする」は一体だった

### (1)親がわが子に期待するのは「思いやりのある人に」

地域の福祉センターなどに行くと、似たような言葉があちこちに書かれてある。「愛」「思いやり」「やさしさ」「ボランティア」など。福祉を一言で言えば、そういう言葉で表されると、福祉関係者は考えているのだろう。福祉関係者に限らない。小学生の親たちに、「子どもにどういうことを期待しているか？」と聞いたら、「成績よりも、思いやりのある子に育ててほしい」と言っていたのが印象的だった。福祉イコール「やさしさ」という点で、福祉機関や一般住民の考えは一致しているのだ。

### (2)「思いやりのある人」ってどんな人？

ここで面白い情報を提供しよう。アメリカでは「向社会行動」の研究がなされて

いる。「向社会行動」つまり「反社会行動」の反対、思いやりの研究である。クラスの子のやさしさ度を測定し、最も点数が高かった生徒の性格特性や家庭環境を調べるのだ。何人かの研究者の結論を総合すると、おおよそ次のような結果になる。

この中で注目すべきは、やさしい子は「他人の助けを求めようとする」という点である。人を助けようとする子は、自分が困った時は他人に助けを求めようとするというのである。

これはどういうことか？ こう考えたらどうか。人にやさしい人、つまり人を大事にする人というのは、自分も大事にする人だ。だから自分が困った時は臆することなく他人に助けを求めようとするのだと。つまり自分を大事にする人こそ、他人も大事にしようとする人だと。

「人を大事にする」と「自分を大事にする」は、一体だったのだ。



## 2.「身を守る力」が弱い！

### (1)自分のいのちを守るという当たり前の行為ができていない

そこで福祉を考える手始めに、自分を大事にすることを深めてみよう。

既に述べたように、福祉と聞くと、私たちはサービスやボランティアを思い起こ



す。福祉というのは、要援護状態のだけか（他人）の世話をすることだと思っているからである。

しかし今、もっと大事なものは、私たち一人ひとりが、まず自分の身をしっかり守るようにすることだ。「そんなことは当たり前だ」と反論されるかもしれないが、実際に福祉がなかなかうまく進まないのは、私たち一人ひとりが自分のいのちを守るといふ当たり前の行為を正しく実践していないからなのだ。

## **(2)自分の問題を隠したり、引きこもる人**

たとえば福祉サービスのスタッフ、またはボランティア活動の担い手として、あるいはご近所の世話焼きさんとして、特に困るのはどんなことか。サービスや活動の対象者が困り事を打ち明けてくれず、どのように助ければいいのか分からないことなのだ。

家族に障害や認知症があることを隠したり、助けの手を拒否して引きこもる人もいる。一人暮らしの高齢者で、見守ってくれる人や頼み事ができる相手を確認するなど、自分に何かあった時の備えをしている人もいることはいるが、ごくわずかだ。

# **3.「自助力」とは助けられ上手のこと**

## **(1)自助力とは、他人の手を借りるテクニック**

「自助」という言葉がよく使われる。困ったことがあった時に、自分や身内だけでなんとかすることだと思われているが、これはおかしい。そもそも、自分や家族の力だけでなんとかできる程度の問題なら、それほど苦労せずに解決してしまうはずであり、むしろそれだけでは解決がつかない問題をどうするかが、私たちにとっては課題であるはずなのだ。

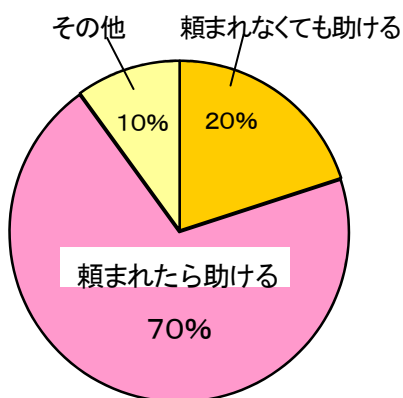
だから、自助が難しいのは、自分の問題を解決するために、他人の手を借りねばならないからである。自分だけの力ではどうしても限りがあり、必要な時には他の人に助けてもらわなければ、私たちは生きていけない。周りの人たちの力を巧みに

集め、活用する腕こそが自助力の柱とも言えるのだ。

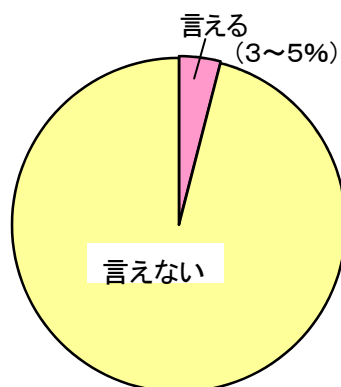
## (2) 「助けて！」と叫べば95%が応えてくれるニッポン

こんなアンケートが実施された。「あなたは足元に困っている人がいたらどうしますか?」。選択肢は3つ。①「頼まれなくても助ける」、②「頼まれたら助ける」、③「ことわる」。結果は①が23%。②が72%。③が5%。つまり困った人が「助けて!」と言えば、95%の人が助けてくれるということである。

足元で困った人がいたら?



困ったとき「助けて!」と言えるか?



この調査の元になった事実がある。ある車椅子の高齢男性が、毎日、買い物に出かけた時に、「すみません、車イスを押してくれませんか?」とまわりの人に声をかけているというのだが、それに応じてくれる人は、10人のうち何人なのかと彼に尋ねたら、即座に「9人」と答えたのである。行政が調査をした結果を見ると、彼の言ったとおりであることがわかった。

## (3) 「助けて!」と言えない日本人—これが問題だ

日本人の9割が困った人を助ける気があるのに、なぜ助け合いが広がらないのか。そこでもう1つ、自前でアンケートをしてみた。講演会等で、「自分が困った時、周りの人に『助けて!』と言える人は?」と手を挙げてもらうと、ほとんどの場合、手が挙がるのは、わずかに3~5%。大部分の人が、助けを求めることができなかった。これでは先程の「頼まれたら助ける」という72%の人は、動きようがない

のだ。

そうなる、頼りになるのは「頼まれなくても助ける」と答えた23%の人、ということになるが、現実はその人が行動を起こすと、「お節介」「でしゃばり」などと陰口を言われるので、あまり動けない。これでは、「助ける」という95%は「幻の95%」となってしまう。

#### **(4)助けてもらおうとプライドがつぶれる？**

問題を抱えた当事者にとっての第一の行動は「助けを求める」ことだが、これがどうも誤解されている気がする。「助けられ」の話をする、きまって高年男性などがこう言う。「そろそろ、わしもプライドは捨てて『助けて』と言うか」、と。助けてもらおうことはプライドをつぶされることだと思っている。

同じような話がある。私は「助けられ上手講座」をひらくことをお勧めしているが、その場で1人の女性がこんなことを言っていた。「私はいつもボランティア活動をしているのですが、今日はこの講座に顔を出してみました。そこで私の謎がようやく解けました。『私はなぜ助けを求めないのか』という謎ですが、助けてもらおうということは、自分の弱さをさらけ出すことだったんですね。だから『助けて!』って言えなかった」。

## **4.「助けられ」は、もう一つの福祉活動**

### **(1)「車いすを押して」とお願いしていた男性が表彰された**

助けを求めることは自分の弱さをさらけ出すことだった、だから自分のプライドがつぶされる—ということだが、本当にそうなのか。面白いことを発見した。世の中には「助けられ上手さん」という人がいる。助けを求めるのに躊躇せず、しかもそのやり方が巧みな人である。その人は、違う言い方をしている。「自分の弱みを知っていただく」と。この姿勢の違いは何なのか。

先ほど紹介した車椅子の高齢男性。1人で買い物などに出かけると、周りの人に

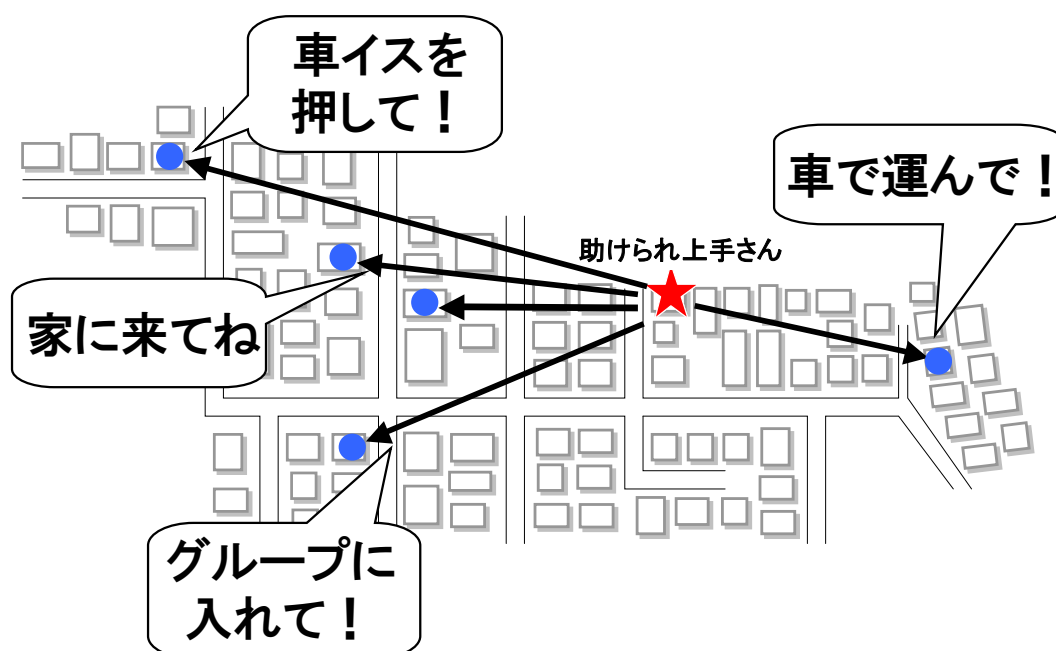
気軽に「すみません、車いすを押してくれますか？」などをお願いしている。その彼が福祉大会で表彰された。

では彼が表彰される理由は何なのか。その表彰状には、こうある。「助け合い推進貢献賞」。彼を助けている人たちも同じ理由で表彰された。これは、どういうことなのか。

## (2)助けと助けられの2つの福祉活動があった

「人を助ける」ことを福祉活動と言う。では「助けられる」人の行動は何なのか。何でもないのか。ではこんな事例を紹介しよう。

私は支え合いマップづくりというものを提唱している。人々のふれあいや助け合いの実態を住宅地図にのせ、その関係の線を引くのだ。すると、こんな事例が出てくる。車いすの夫を介護する女性が、周りの人にいろいろお願いしている。「あなたは夫を病院まで運んでね」「あなたは私をグループに入れて」(ストレス対策)「(私は介護で外出できないので)うちにお喋りに来てね」「夫の車いすを押して」。



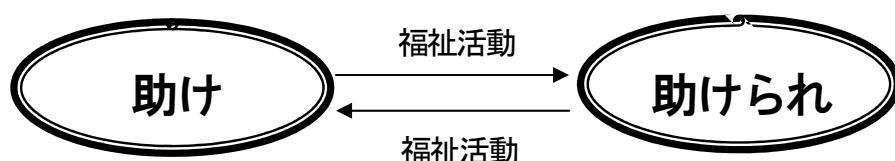
彼女にお願いされている人たちに感想を聞いてみた。全員、「これなら助けやすい」。それはそうだ。1人で介護している女性がいて、助けてあげたいと思っても、

頼まれなければ手を出しにくいし、何をしてあげればいいのかも分からない。でもこの女性の場合、本人がしてほしいことを指示してくれるのだし、しかも運転やお喋りの相手など、それぞれの人に合った頼み事をしてくれるのだから、こんなにやりやすいことはない。

ここが大事なところだが、彼等の活動をコーディネートして、それぞれの人に依頼するという、一番手のかかる行為を担っているのが、活動の受け手である女性本人なのだ。

逆に、支援を必要としているにもかかわらず、自分の問題を解決する努力をせずに引きこもり、助けの手が伸ばされても拒否しているような人がいれば、福祉活動はまったく進まない。

こう見ると、助けられる側の人もただの客体などではなく、活動の担い手と受け手の双方の行為が「福祉」活動だと考えるべきであるし、どちらかと言えば、受け手である当事者が果たす役割の方が重要だと言えるのである。



## 5.「助けられ上手」のコツとは？

では助けられ上手になるには、どんなコツがあるのか。以下に並べてみよう。

### ①善意は断らない

すすんで助けを求めることはできなくても、助けの手が伸びた時にそれを断らず、素直に受け入れることから始めたらどうか。

### ②「ありがとう」と言う

私たちは善意を受けた時に「ありがとう」という代わりに「すみません」と言う

クセがついている。そこで「すみません」を「ありがとう」に転換することから始めたらどうか。自分は今、善意をいただいたということを自分に対しても、相手に対しても表明したということだ。これも助けられ上手への第一歩となる。

### ③自分の抱えた問題を周りに打ち明ける

助けを求める前段階として、自分の今の支援が必要な状態やその原因になる心身の状態などを打ち明ける行為がある。それができれば、自然に「助け」の手がやって来るし、当人もそれを受け入れる体制ができたということだ。

### ④「助けて！」と言える相手を1人は見つける

誰にでも「助けて！」と言える人は、そうたくさんいるものではない。それよりも、「あの人になら言える」という相手を、1人か2人だけ見つけるのならできようし、それでもいいのではないか。

### ⑤世話焼きさんを見つけてある

これはたいへん効果的な方法である。「困っている人がいたら気になって仕方がない」という人があなたの周りにも必ずいる。「面倒見のいい人」と言われる人物だ。クラスにも一人はいるだろう。この人をしっかりつかまえておくことだ。この人は人の好き嫌いがなく、困っている人なら誰でも助けてくれる。

### ⑥普段から人に尽くしておく

ある集会で、80代の後半でかなり身体も弱っている男性が顔を出していたが、集まった人たちは口々にこう言い合っていた。「あのおじいちゃんに何かあったら、皆で助けることにしているのです」と。理由を聞くと、「あの人はこれまでに町内会長や民生委員などずっとみんなの世話をしてきたから」。地域はこういう仕組みになっている。だから、老後に周りの人に助けてもらうためには、今のうちに人のお世話を焼いておくことだ。

助けられ上手講座の感想文の中に、こういうのがあった。「マンション住まい。近所の小さなお子さんを、よく預かっていた。その子たちも大きくなり、お母さんに余裕ができて、今は私が困った時、買い物をしてくれたり、ドライバーをしてくれる」。こういうことが地域では日常的に起こっているのだ。

## ⑦グループに助け合いを仕掛ける

せっかく地域にはたくさんの種類のグループができていのに、仲間同士で助け合うということは、あまりされていない。だがボランティアグループだって、趣味グループだって、仲間が困った時は助け合っているはずなのだ。誰かが助け合いを仕掛けていく必要がある。手っ取り早いのは、自分の困ったことを仲間に打ち明け、助けてもらうことだ。

# 6.「助けられ上手さん」はどんな人？

## (1)「母と一緒に徘徊してくれるボランティア」募集

認知症になった実母を引き取った女性。徘徊行動も激しく、予想以上に大変で、とうとう夜も寝られなくなってしまった。そこで考えたのが、助け手を探すことだった。懇意にしているクリーニング店に「ボランティア募集」の張り紙をしたが、そこにはこうあった。①母と一緒に徘徊してくれるボランティア。②母と一緒に花札をして、時々負けてくれるボランティアなど。

その他にも、布があると母は熱心に縫い始める。それならばと、③「古着をください」と新聞に投書。ところが認知症が進んで縫えなくなった。ためしに布に線を引くと、その線に沿って縫い始める。そこで、④布に線引きボランティア募集。まだある。介護している本人もストレスが溜まってきた。そこで⑤私のストレス対策ボランティア募集。さらに⑥母を時々預かってくれるボランティアも見つけた。

## (2)友達を自宅で接待。「要介護になったらお願いね」



「助けられ上手さん」の中には、「備え上手さん」もいる。要介護になってから助け手を探すのは大変だが、助け手がいなければ自立生活を維持できなくなる。では、そうなる前から備えておけばどうなのか。

富山県滑川市社会福祉協議会の元会長・山下節子さん（上の写真・右から3人目）は、取材時、70歳で一人暮らしだったが、元気なうちから自分の要介護の未来を見据えてしっかり準備をしていた。ビーチボールのグループを立ち上げて、毎回、終わったらメンバーを自宅に招待し、ごちそうする。「私が要介護になったらお願いね」というメッセージだ。メンバーの中にヘルパーや民生委員等、福祉の人材も入っていて、「セッチちゃんに何かあったら私が仕切るからね」と宣言するメンバーもいた。

それから10数年後、彼女が要介護になった時、どうなったか。先日、富山テレビが助けられ上手のテーマを取り上げた。そこで山下さんが登場（右の写真・中央）したが、やはりビーチボールチームの元メンバーやその夫を中心とした人たちが彼女を支えていた。その1人がこう言っていた。「昔、助けられたから、いま返そうと」。



## 7. 要援護になるほど自分をオープンに

孤独死をするのは、多くが引きこもりの人だ。自分のプライバシーを守ろうとするのはいいとして、その結果、孤独死してしまうのでは仕方がない。それで孤独死が起きると、マスコミはすぐに「民生委員は何をしていた」と非難する。

これはお門違いというべきで、そろそろ自己責任という考え方を日本にも導入す



べきである。「プライバシー」を盾に、関わりを拒否して引きこもるのであれば、その行為が生み出す結果に対して責任を負うべきなのだ。

自身が要援護になったら、命を守るためには、要援護状態が高くなるほど、自らをオープンにする勇気が必要だ。

それが実行している人がいる。一日中ドアを開けっ放しにしている人。出掛ける時は、その旨を書いた紙を玄関に張り出す人。「不用心」だとか、泥棒が見たらどうなるのかと言う人もいるが、それどころではないのだ。まず命を守ることが先決なのだから。

## 8.「自分事」から「他人事」へ

### (1)「他人事を自分事に」はむずかしい

ある福祉のシンポジウムで、興味深いテーマが提示された。「他人事を自分事に」というものだ。福祉問題を他人事として考えるのではなく、自分事として真剣に考えてみようということだろう。

これは意図としては素晴らしいし、そうできればベストなのだが、どうも私たちはそれが難しい。他人事はいつまでたっても他人事に留まってしまう。そして自分の事なら、誰に言われずとも取り組む。

### (2)まず自分事に取り組んでみる

そこで、逆に考えてみてもいいかもしれない。まず自分事に取り組んでみる。それなら容易だ。その延長で、たまには他人のことも考えてみるという順序である。

前述のシンポジウムで、パネラーの1人がこういう発表をしていた。ごく普通のお父さんで、朝、登校する息子が横断歩道を渡るのを想像したら、心配になった。思い切って、出社の前に旗を持って、息子が渡るのを見守ることにした。

話はそれで終わらない。いくらなんでも、自分の息子が渡ったら、さっさと引き上げるといふわけにはいかない。他の子どもたちのことも心配になり、とうとう地

域ぐるみのパトロール活動に発展したということである。

自分事に取り組み、同じような立場の人のことも心配になる。それに取り組むことで、自分事から他人事に発展するというわけだ。

### (3)若者は自分事から出発する

大学生に福祉の講義をしていて、「ボランティア」の話になったら、ブーイングが起きた。「ボランティアなんて、欺瞞だ」「嘘くさい」と。そんなにボランティアが嫌なら、ではどういうことなら取り組むのかと聞いてみたら、そこから若者たちの意外な部分が見えてきた。

たしかに、他人の問題に関わることは良いことかもしれないが、今どきの人間が本気でそんなことをするとは信じられない。だから「嘘くさい」。しかし自分の問題に取り組むのなら、嘘はない。だからそこから出発するのならいいのだと。

自分の問題とは、どんな問題か。それにどう取り組めるのか。たとえば、

- ①せっかく登校したのに休講だった。→それなら僕が朝一番で登校して休講を調べ、仲間に知らせてあげる。
- ②1冊3千円の教科書を買わせる教授がいる。→それなら4年生から譲り受けて大学祭で安く売ろう。
- ③英語の単位を取れそうにない。→そこで英語に強い生徒が個人教授する。

このように、要するに後で紹介する当事者グループの発想で、同じ問題を抱えた者同士で解決していくということなのだ。そういえばある福祉機関に勤める女性たちが、早朝出社や残業の時にLINEを使って、その日わが子を預かってくれる仲間を探し、預け合いをしていた。

私たちは、福祉を自分事として考えるのは気が進まないものだと思っていたが、今の若者はそんなことに気後れせず、気軽に自分の問題も出し合い、助け合っている。

## <第2章>

---

# 誰を大事にするのか？

「人を大事にする」という時、私たちは誰を大事にする必要があるのか。答えは「誰でも」だ。悪い人でも、暴力的な人でも、周りの人に迷惑をかける人も、認知症の人、寝たきりの人も、である。

## 1.「悪い人」ではなく 「人間らしく生きるのを阻まれた人」

私は「支え合いマップ」というものを普及させている。

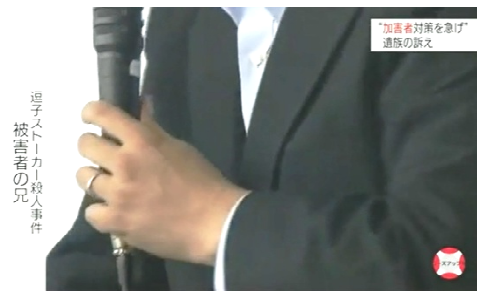
面白いことだが、そのマップ作りの中で「皆さん、この地区の気になる人はだれですか？」と聞くと、マップの中の何軒かを指さすのだが、その人たちはどのように「気になる」のかと聞くと、人に迷惑をかける人、変わり者、精神障害の人など、私が期待していた人とは異なるのである。

住民にとって「気になる人」とは、支援の必要な人ではなく、排除したい対象ということらしいのだ。排除するのではなく、そういう人たちもふれあいの仲間に加えましょうと言うと、「だいたいあの人は性格が悪い」とか「ヘンにプライドが高い」などと言う。自分たちが助ける相手ではない、というのだ。

### (1) ストーカーに妹を殺された男性がストーカーの救済

そこで私はこう言うことにしている。福祉の世界では「悪い人」や「迷惑な人」は存在しない。すべて「人間らしく生きるのを阻まれた人」と考えるべきだ。つまり私たちが支援すべき対象でもあるのだ。

最近ストーカーが話題になっている。ある女性タレントは7年間もストーカーに悩まされ、最近ようやく犯人が逮捕されて「ほっとしています」というコメントを出していた。この問題を取り上げたテレビ番組の中で、コメンテーターが「ただ悪い人と切り捨てるのではなく、必ず心の問題を抱えているのだから、そういう目でも見てあげないと」と発言しているのが印象的だった。



三好梨絵さんの兄(NHK「クローズアップ現代」)

ストーカーに妹を殺害された男性が、ストーカーの救済策の研究に乗り出したという。彼が加害者について痛感したのは、「加害者を変えないと、警察がいくら動いても被害者の元に戻ってしまう」ということだった。すでに妹は殺されてしまったが、各地で同じ犯罪が起きているし、今後も起き続けるだろう。ならばと「被害者を守るために加害者を治療する」という発想で、同じ思いを持っていた研究者らと研究会を立ち上げたのである。

## (2)連続殺人犯と企業の重役は酷似していた！

「サイコパス」(反社会的人格障害・精神病質者)という精神障害は、映画「羊たちの沈黙」で人間を喰らうレクター博士や、4年間で35人もの女性を殺害したテッド・バンディといった連続殺人犯がその代名詞となってきた。

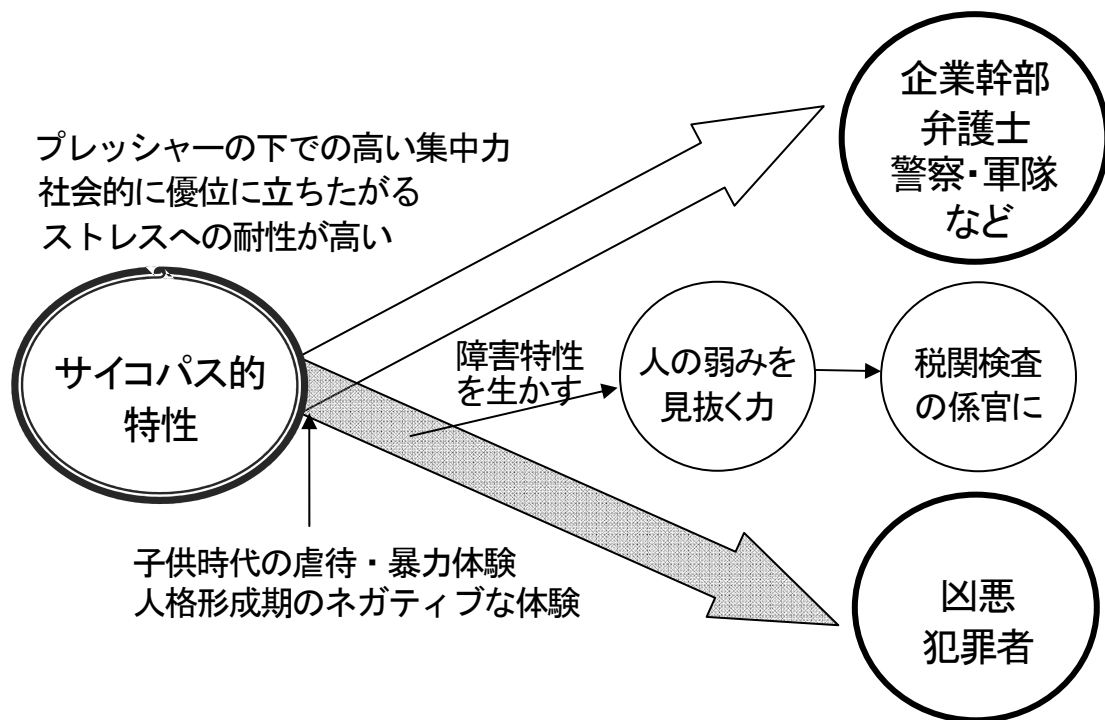


映画「羊たちの沈黙」(ワーナー・ブラザーズ)

ところがサイコパス研究の第一人者の1人、オックスフォード大学・感情神経科学センターのケヴィン・ダットン博士によれば、サイコパスというのは特定の人だけが持っている病気ではなく、サイコパス的特性という連続した帯のようなものであり、多かれ少なかれ、私たちの誰もがそのどこかに位置していることが最近の研究でわかってきた(NHK「心と脳の白熱教室」)。その特性は、生かし方次第でビジネスでの成功にもつながるし、社会の役にも立つというのだ。アメリカのトップ企業の重役200人以上を対象に行われた調査でも、サイコパスの連続殺人犯に見られる能力が、ビジネスの世界で

は才能として開花していることが明らかになったという。恐れを知らず、社会的に優位に立ち上がり、ストレスへの耐性が高いといったサイコパスの特性は、警察や軍隊、救命隊員といった職業でも生かされていた。

では、サイコパスの特性を能力として開花できる人と、同じ特性が反社会性や暴力犯罪と結びついてしまう人の違いは何か。それは主に育った環境であり、子供の時に受けた虐待や暴力、人格形成期のネガティブな体験などが引き金になり、暴力性や反社会性、自己制御力の欠如等がサイコパス特性と結びついてしまうらしい。



サイコパスの連続殺人犯は、狙いやすい被害者を歩き方だけで見分けるなど「他人の弱みを見抜く能力」が高いと考えられているが、ダットン博士は、一見邪悪なこの能力さえ、社会に役立てる方法があるはずだと考え、ある日、空港でひらめいた。「サイコパスの人を税関検査の係官にしたらどうか？」と。麻薬などを隠し持っている人を、表情や仕草で見分けられるからだ。

オックスフォード大学・感情神経科学センター代表のエレーヌ・フォックス教授によれば、最近の研究で、子供時代に虐待などのつらい環境に置かれた子どもが救われる共通要素が1つ分かってきたという。それは、その子が心から信頼できる大

人が周囲に1人でも存在することであり、それは必ずしも親である必要はなく、近所のおばさんでもいいというから、やはり問題を抱えた家庭に地域が関わっていくことは重要なことなのだ。

### (3)元麻薬の売人が企業のトップセールスマンに

元受刑者が就職するのは極めて難しいと言われる。それはアメリカでも変わらないが、この国ではユニークな取り組みが行われていた。元ギャングたちが裏稼業で発揮してきたビジネスセンスを高く評価し、それを合法ビジネスで生かせるように育成するというやり方である。

ニューヨークに、元ギャングリーダーや麻薬の売人たちのビジネス力を徹底して開発し、プロのビジネスマンたちの支援で起業させて立派に利益を生み出しているという、驚きの非営利団体「ディファイ・ベンチャーズ」がある。(以下、ビジネス誌「Inc.」より)。

設立者のキャサリン・ロアさんは、ベンチャー企業や未公開株式への投資を扱う会社にいた経験から、高い能力を持つ受刑者に投資した場合の利益率の高さに気づき、活動を始めたという。

「私は初めて刑務所を訪れた時、受刑者たちの持つ性質が、企業のCEOやウォール街の人々のそれと非常に共通していることにすぐに気づき、大きな衝撃を受けました」。

ロアさんはまず、テキサスで「刑務所起業プログラム」を立ち上げる。80%の参加者は暴力犯罪の前科を持ち、大半がギャング活動や麻薬の売買において大変立

派な(?)リーダーシップと能力を証明した人たちだ。

彼女が指導した5年間に600人が卒業したが、彼等の再犯率はわずか5%で、98%が就業し、60以上のビジネスを立ち上げた。



キャサリン・ロアさん(中央)と元受刑者たち  
<Defy Ventures>ホームページより

ロアさんがこの活動を始めた時、まわりからは「クレイジー」とけなされた。ベテランの刑務職員からは「こいつらは実家のママに送る手紙さえ満足に書けないんだぞ」と嘲られ、元ギャングへのそうした誤った思い込みが彼女のやる気に火をつけたという。

再犯した人の95%が逮捕時に無職だった—という事実を、彼女は重視する。「こう考えてみてください。あなたという人間が、これからの人生ずっと、これまでにあなたがした最悪の行為によって評価され続けるとしたら、どんな気がしますか？」

アメリカでは他にも、一般企業が元ギャングの能力を見込んで雇用し、育成に成功した事例がある。

たとえば「エレクトロニック・リサイクラーズ・インターナショナル」という電子機器リサイクル会社だ。世界を股にかけて活躍する同社が誇るトップセールスマンは、元麻薬の売人である。

全身100カ所に入れ墨を入れたこの元受刑者は、60回も就職面接で落とされ続けていたが、カリスマ経営者として知られるCEOのジョン・シェゲリアンさんは、面接で感じた彼の「頭の良さ」を評価し、雇用した。

するとすぐ、その男性の働きぶりに、同社COO（最高執行責任者）である妻も目を付けた。「彼は頭がいいし、いろんな能力を持っている。麻薬セールスのベテランなんだから、うちの商品を守るのだって大して変わらないわよ」。夫婦の太っ腹な期待に、男性は見事に応えた。「彼はいまや、1日19時間は世界中からの取引の電話を受け、プラスチックやガラス、銅など様々な材料の売り買いに奔走しています。私たちは、彼が生まれ持った能力を活用し、良い方向でその力を生かせるように支援しただけです」（CBS ニュース）。

## 2.どんなに重い要介護でも大事に

### (1)認知症の人を生け花教室の講師に

ある地域でのマップ作りで、認知症の女性の話になり、「彼女に何か趣味はない

かな？」と住民に尋ねると、「あの人はもうだめだよ、完全にボケちゃった」。「でも、人間は最後の最後まで自分らしく生きたいと思っているはずですよ。認知症になってもそれは変わりません」と反論し、彼女の以前の趣味を聞き出したら、生け花の先生をしていたことがわかった。ならば、みんなに生け花を教えてもらおうと呼びかけたのである。



じつは、これを既に実行していた地区が福岡県にあったのだ。やはり私が一緒にマップを作ったのだが、認知症の女性が毎日地区内を歩いている。その途中、あちこちの家を訪れて生け花の手直しをしているというので、ならば彼女を講師にして生け花教室を開いたらどうかと提案したら、地元が実行してくれた（写真・右端が女性）。

## (2)超高齢になっても「卒業」させない

福岡県の福津市で、社会福祉協議会のスタッフと一緒に支え合いマップづくりをしていて、おもしろいことに気づいた。今は超高齢社会と、よく言われる。老々介護の時代だとも。超高齢になれば足腰が弱くなる。耳も遠くなる。妻や夫を介護しなければならなくなる。デイサービスを利用するようになる。老人ホームに入所する人も。

そうなると、今まで参加していたサロンや老人クラブなどは「卒業」となる。畑で野菜を作って、できたものをおすそ分けするといった活動もおしまい。それが当たり前だと私たちは見てしまう。「卒業」を容認してしまえば、課題というものがなくなるのだ。

では、福祉とは元々何だったのか。厚労省は言っている。どんなに重い要介護でも、住み慣れた家や地域でその人らしく生きられるように応援しようと。ならば、そういう人たちを簡単に卒業させてしまったら、福祉は成り立たなくなる。「なん



としても卒業させない」のが福祉だったのだ。次の表は、実際の「卒業」の事例と、それに対する対抗処置である。

### ＜「卒業」させない＞

本人の事情	「卒業」の対象	「卒業」させない策
超高齢で耳が遠くなった。「通訳」がいたが、要介護になった	結果として、サロンへの足が遠のいた	新しい「通訳」を掘り起こそう
109歳になった	老人クラブから「卒業」した	メンバーが本人宅を訪れて「押しかけクラブ」
膝の手術を控えている	女性サロンから引退。畑で野菜作りができなくなった。	メンバーが本人宅へ「押しかけサロン」。畑に連れ出そう。
デイサービスを利用し始めた	日程が重なり老人クラブに参加できなくなった	ケアマネと日程調整で参加可能にしよう
元大学教授。元自治会長で、デイサービスを利用し始めた	地域活動から完全に引退	教養講座の講師になってもらおう
90代の男性。認知症の妻の介護に専念	サロンや老人クラブなど地域活動から引退	要介護の妻同伴の参加も勧めよう
老人ホームに入所	地域から完全に撤退	組費をまだ徴収していた。里帰りですぐ自治会活動の参加を応援。
高齢で足腰が立たなくなった	カラオケサークルに行けなくなった	仲間が車で運んであげよう

## <第3章>

---

# 人をどのように大事にするのか？

ここから扱うのは、人間をどういうふうに大事にするのかという点である。ここでは最も重要な4つの項目に絞って説明していこう。

- ①本人の誇りを守ってあげる。
- ②本人の能力を引き出してあげる。
- ③本人を社会の仲間に加えてあげる。
- ④ミエミエでやってくれるな！

## 1. 誇りをつぶさない支援

助けてもらう側の人最も警戒しているのは、自分の誇りがつぶされてしまうことである。これは助けてもらう側になれば、だれでも抱く恐れである。だから担い手の方は、このことを常に頭に入れておく必要がある。

### (1) 「普通より遥かに高いレベル」のサービス

「デイサービスの送迎車を家の前に横付けされるのは困る」といった苦情が、利用者やその家族から出ている。もっと離れた所にとめてくれというのだ。福祉車両というだけでそういう苦情が出てくるのは、どうしてなのか。これがもし「リムジンでお迎え」なら、反応は変わってくるかもしれない。

はっきり言えば、福祉サービスのレベルは「普通以下」でいいと思われている。そのため、福祉には暗いイメージが付きまとっている。では普通程度のレベルではどうか。それではまだ足りない。できれば「普通よりも遥かに高いレベル」を当事者は望んでいるのだ。なぜなのか。

弱者には、常に誇りをつぶされているという意識がある。その誇りを取り戻すすべは、今述べたように「普通」レベルでもなく、「普通以上のレベル」である必要があるのだ。

## (2)火炎放射器付き車椅子なら？

ネット上で、男性たちの圧倒的な支持を得ている車椅子があった。アメリカのテレビ番組「バトロボット」(ロボット同士を戦わせる番組)でロボットを製作していたランス・グレイトハウスさん特製の、「ロード・ヒューモンガス」だ。一言で言えば「火炎放射器付き車椅子」で、ほぼすべての地形に対応できる車輪を装備。座席は海洋レスキュー隊のヘリのもので、4.5mの炎を発射することができる。

ランスさんはこれまで、クールでクレイジーな乗り物や機械を趣味で製作してきたが、兄がパーキンソン病になった時、「見るからに医療器具そのまま」の車椅子ばかりであることに疑問を抱き、「普通の男たちが羨むほどカッコいい」車椅子に乘坐しようと決心したという。

しかし、「カッコいい」を実現するために、なぜ火炎放射器まで必要なのか？日本の「カッコいい車椅子」を検索すると、出てくるのはデザインを工夫した車椅子ばかりだ。だが、それだけで健常の男性たちに「こんな車椅子なら乗ってえ！」と思わせられるだろうか？ 答えはノーだ。では「ロード・ヒューモンガス」ならどうか？ ネットマガジン「ギズモード」の記事でこの車椅子を紹介した男性記者は、こう言い切った。「この車椅子に乗るためなら、オレは自分の足を折りたくなる！」



### (3)アートを履いて有利に立つー義足のファッションモデル

障害者と美と言え、大手化粧品会社「ロレアル」パリ社のイメージ大使に選ばれたエイミー・ムランさんが有名だ。彼女は腓骨（下肢の細い骨）を持たずに生まれたため、両足を切断。義足のアスリートとして、パラリンピックで複数競技の世界記録を更新し、その後はファッションモデルや女優としても活躍している。

エイミーさんは言うまでもなく美人だが、これまでジェニファー・ロペスやビヨンセといった超大物の美女たちが務めてきた役に、知名度では劣るエイミーさんが採用された上、義足を隠すのではなくそれを生かしたCMが作られるということは、障害を含めた一人の女性としての美しさが認められたと言える。

ではエイミーさんは、どのように特別なのだろうか？ エイミーさんについて最も有名な事実と言え、彼女自慢のコレクションー12種類の義足がある。ない足を補うためだけなら、1足あれば足りるはずだが、彼女はそうは考えていない。せっかく自由に足を取り替えられるのだから、単に歩ければいいというのではなく、義足だからできる方法で人生を豊かにしようと考えているのだ。

例えば、走るための義足は、チーターの後ろ足を研究してつくられたカーボン・ファイバー製。きれいに見せたい時は、バービー人形風の義足がある。どれもオーダーメイドで、用途に応じて12種類を使い分ける。

エイミーさんの名を広めた活動の1つが、TEDで行った、義足の可能性についての講演だ。TED（テクノロジー、エンターテイメント、デザインの世界をつなぐ会議を主催する団体）がHPで公開した映像が感動を呼び、多くの人が視聴しているが、その中でこんな話を披露している。



エイミーさんは義足のおかげで、5種類の背丈を選ぶことができる。その中のお気に入りの1足は、背をすらっと高くし、彼女をモデル体型にしてくれる逸品だ。その義足が完成した時、マンハッタンでのパーティーにつけていったところ、彼女を長年知っている女友達が来ていて、エイミーさんの姿を見た途端、口をあぐりと開けて叫んだ。

ケネス・コール社の広告（エイミー・ムランさん）

「あなた、背が高いわっ！！」。エイミーさんが得意気に「そうなの。これ、いいでしょ？」と言うと、その友達はエイミーさんの目を真っすぐに見て、こう言った。「でもエイミー、そんなのって…フェアじゃないわ」。エイミーさんは聴衆と一緒に楽しそうに笑いながら、興奮気味に語った。

「何がおもしろいって、彼女は本気でそう言ったのです。このとき私は、この10年間で社会は変わったと悟りました。もう『欠けたものをいかに補うか』という問題ではなくなったのです。足がないことに新たな可能性が生まれるのです。義足はもはや喪失した足の代替品ではありません。それを身につける人が、そのスペースに自由に、創りたいものを創れるということです」。

彼女はそれを実現するために、既存の医療装具業界の外にいる、科学や芸術の専門家たちに、その才能を提供してくれるよう訴えかけた。現在の医療装具が、欠けた身体の代替品以上のものになるには、最新の科学だけでなく「アート」、つまり「美」も必要だと彼女は言う。「美は重要なものです。美は、人々が目を向けられないもの、こわいと思うものを芸術品に変え、もっとよく見てみたいと思わせ、もしかしたら理解することさえ可能にしてくれるかもしれないのです」。

#### **(4)「福祉の店」が超高級化した時**

先日NHKで取り上げられた、京都府舞鶴市の高級フレンチ・レストラン「ほのぼの屋」。スタッフは統合失調症や知的障害、難病などを抱える人だが、「予約のとれない店」として人気を博し、年間50組のウェディングも手掛け、最近では「一泊ディナー付きで1人2万円以上」のプチホテルも始めるなど、まさに「福祉の店」の常識とイメージを根底から覆す発展を遂げている。

これを実現させたのは、「支配人」である西澤心さんの並外れた情熱とパワーのようだ。舞鶴湾を一望できる一等地に、2億5千万円の建物、そしてグルメファンに名を知られた超一流のシェフを揃えた。従業員を指導したのはホテルの接客インストラクターだ。

「福祉のレストラン」が、普通の店に肩を並べたというよりも、もはや一般的なレ

ストランのレベルをも超えた時、どんな効果が生まれるのか。

まず、この店では原価率を高め設定し、テーブルも少なめで、回転率を上げることも意識していないという。従業員数も多いのでワークシェア的な要素もあるが、それでも月収15万円というスタッフもいる。

こうしたスローライフならぬ「スローワーク」とでも言うような、普通よりは緩やかな働き方ができるおかげで、障害の特徴である強いこだわりや几帳面さを生かしたサービスを提供できている。そのゆとり感とこだわりのサービスが、客にも好評なのだ（「WamNet」記事、NHK「ハートネットTV」）。

もう1つは、「障害者の店」というイメージに、店の高級性が完全に勝ってしまったことだ。建設前は地元住民の反発が強かったが、いざ完成した店で住民をもてなしたところ、一番反対していた男性がこう言ったそうだ。「こんなええもんができるんやったら、わし、反対せんかったのに！」（「ノーマネット」公開の西澤さんの講演録より）。地域の人にとってこの店は「誇り」になっており、海水浴客にも「高台におしゃれなフランス料理の店がありますよ」と教えているそうだ。

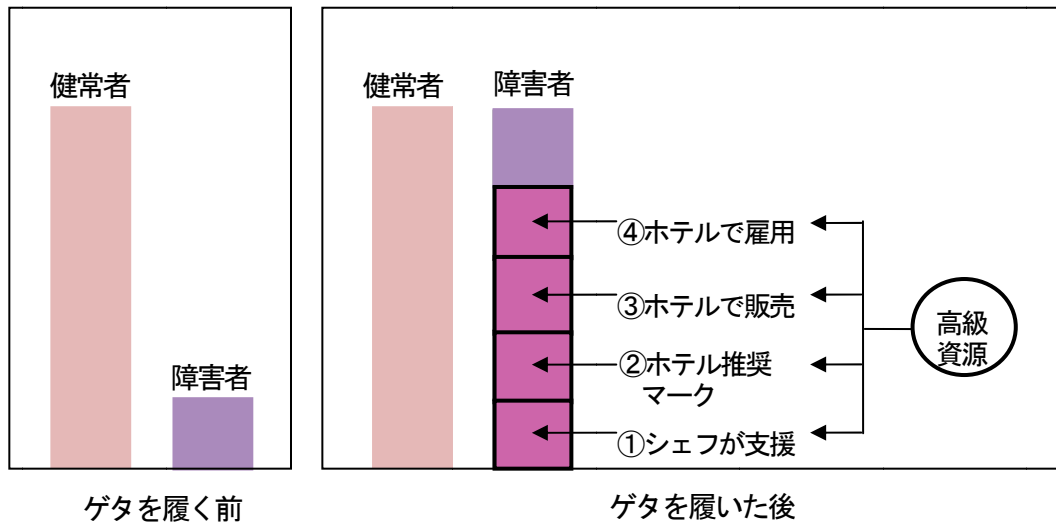
超高級な店で、ゆとりたっぷりのスローワークを楽しんでいる障害者が客にはどう見えるだろうか。おそらく、いわゆる「障害者」のイメージを飛び抜けているのではないか。

## (5)弱者に「下駄を履かせる」ーフェアネスの発想

欧米には「フェアネス」という発想がある。ハンディを抱えた人に提供すべきは、一般より低い水準のサービスではない。同じレベルも駄目。元々ハンディがあるのだから、一般より高い水準のサービスを提供されなければならない。これで両者は同じスタートラインに並べるというわけである。

障害者の作業所で作っている菓子を見て、一流ホテルのシェフのAさんは、その出来に驚いた。それが福祉の店という理由で、不当に安い値段で販売されている！そこで彼は作業所の菓子コンクールを主催し、優勝した作品を「ホテル推奨品」にして、ホテルでも販売してあげた。しかも優秀な1人をホテルで雇用。Aさんは本

業の腕を使って「フェアネス」を実現させたのである。



## (6)福祉は強者と弱者の戦いだっただ

人間は、弱者として善意を受ける立場に置かれた時、屈辱感を感じる。そういう人々が心休まるのは、①普通の人よりも高い位置についた時と、②普通の人とは別の道を歩く時の2つだ。

モビリティ・コンクエスト社の「車椅子用自動三輪車」は、車椅子のまま乗り込める大型オートバイで、社長のアラン・マーティンさんがスキー事故で車椅子になった息子のためにつくったものだ。障害者用だからと甘く見たら大間違い。BMWのエンジンを備え、最高時速は170 km、7.6秒で時速96.6キロまで加速することができるパワー派であるばかりか、男性記者たちが「普通のオートバイがかすんで見える」と羨むほど、迫力のある美しいボディーを実現した。

健常者が羨むぐらいかっこいいオートバイに乗った時にはじめて、「ざまあみやがれ、悔しかったら障害者になってみよ」と、健常者を見返すことができるのだ。ところが私たちは、対象者が自分よりも高い位置に上ることを快く思っていない。



モビリティ・コンクエスト社の宣伝写真

福祉とは、弱者と強者の戦いと見た方がわかりやすいかもしれない。弱者のハイレベルの欲求を、社会が本気で実現しようとは考えるはずがないからだ。これらは当事者の側が闘い取るしかないかもしれない。当事者の誇りを取り戻すために、社会から超高質の資源を「ふんだくってくる」人（前述の西澤心さんのように）が彼らの本当の味方なのだ。

## 2.障害は才能だった—本人の能力を引き出す

### (1)障害者や要介護者は何もできない人？

福祉関係者も住民も同じだが、どういうわけか、対象としている人が要介護とわかると、途端に「この人は何もできない人」と思い込んでしまう。

だから、グラウンドゴルフに興じていた女性が認知症になったと聞くと、もうグラウンドゴルフはできないと決めつけてしまう。「認知症でもやり方を工夫すればできる」と私が言っても、まともに取り合ってもらえない。この問題を解決しなければ、ただ「能力開発を」と言っても説得力がない。

### (2)なぜ認知症を隠すのか？

認知症に限らない。私たちが病気や障害などを持っていることを隠したがるのは、そのために自分の能力を疑われることを恐れるからだ。病気や障害によって、どんな能力がどの程度落ちたのかを正しく評価し、サポートしてくれるならまだいいのだが、そうではない。「認知症になったら、もうアウト」といった極端な偏見が根深くあるのだ。

### (3)天井のシミが気になる→印刷ミスに瞬時に気が付く

「何もできない人」という偏見を超えた後に待ち構えている課題は、その人の能力をどう発掘して生かしていくかということだが、この部分で新しい取り組みが始ま



っている。「障害特性を生かす」という発想である。障害は社会生活をする上でハンディキャップになるが、その特性を逆利用して能力に転化してしまうという手法である。

例えば、天井の細かいシミなどが気になるのは自閉症の1つの特性だが、そのことを逆利用して、「ちょっとした印刷ミスに瞬時に気づく」能力として印刷所で活かしているといった具合だ。生かせる対象が見つければ、障害はそのまま能力に変質するのだ。他にも、印刷所のスタッフに求められるのは、紙の裏表を見分ける能力だが、これも瞬時に見分けられるという。

自閉症では、他にも、こだわりの強さを生かして豆腐の薄切り技術で名人になったり、細部への関心や同じことを繰り返しても飽きないという特性を生かして、有能なソフトウェアのテスターとして活躍している人たちもいる。後者については、自閉症の息子を持つデンマークの男性が専門の就労支援会社「スペシャリストルネ」を立ち上げ、世界的な大企業の信頼を得て、多くの国に広がっている。

#### (4)イスラエル軍で自閉症の兵士たちが担っている任務とは？

自閉症の人の能力が、意外なところで、高度に専門的な職業に生かされていた。イスラエル軍が情報部隊において、自閉症の若者を多く活用しているというのだ。「軍にとっては、彼等の優れた映像思考能力や細部へのこだわりが、航空写真のアナリストという高度に専門的な任務において資産になっている」とアトランティック誌は伝えている。

この部隊では、数十人の自閉症の人が働いており、軍事衛星を使って世界中からリアルタイムで送られてくる複雑な写真を分析している。

普通の人にとって、同じ場所を様々なアングルから撮影した何枚もの写真を1ミリごとに精査して、異変やパターンを見つけ出すのは困難な仕事だが、自閉症



写真:「9900ユニット」で写真の分析を行う兵士  
(BBCニュース映像)

の兵士にとっては違う。ある青年は、「まるで趣味のように、とてもリラックスできる仕事」だと言い、軍によれば、彼の功績で兵士たちの命が救われた場面がこれまでに何度もあったという。

このような専門職に就けるといって、「自閉症といっても、飛び抜けて優秀な人だけだろう」と思われがちだが、このプログラムはイスラエルの徴兵制度（18歳から）の一環であり、特別に高学歴な人を抜擢しているわけではなく、希望者は高校卒業時にパターン認識力などの試験と面接を受け、パスすれば参加できるというものだ。その代わりに、大学の保健専門学部の協力を得て、手厚いサポートシステムと教育システムが用意されており、軍の本気度が推察される。

実際の衛星写真を使った技術研修の他に、ソフトスキルの教育（バスの乗り方から、時間通りにバスが来なくてもパニックにならずに他の方法で通勤できるようにするトレーニングなど）や、カウンセラーによる日常的なサポートが提供されているという。

「近所の自閉症の男の子が、ある日突然、軍の制服に身を包んで家に帰って来る。その姿をご近所中の人が目撃するわけです。その子は、軍を退役した後も、その能力を使って民間企業で働き続けることができると耳にする。こういうことが、ごく自然に、非常に大きな影響を与えることができるのです」（プロジェクトを担当する作業療法士・アトランティック誌）。

## **(5)社会が障害者の行動に「価値」を見つけられるか？**

障害児の「能力」を発掘した時、それを社会に「能力」と認めさせるには、社会の価値観を変えさせなければならない場合もある。

ある町にTちゃんという人気者の障害児がいて、一日中まちを自転車で走り回っている。朝は駅前において、通勤するサラリーマンたちに「おはようございます！」と声をかける。昼間は別の駅に行って、電車が到着すると駅員に改札業務を促したり、児童館や図書館で掃除の手伝いなどを買って出る。夜になると公民館に行って、趣味グループなどの活動を手伝う。いつもニコニコしていて、こちらも楽しくなる。

これもまた「障害」の表れだろうが、この行動をそのまま社会は価値として認めることはできないものか。「ふれあいコーディネーター」といった呼称で、いくばくかの手当をまちは支給してもいい。それには地域住民が、彼がやっていることの価値を認めなければならない。

企業の社会貢献セミナーで、事例発表者として招待された某企業の知的障害者向け授産施設の長が、余談として「面白い障害者がいる」と言い出した。その人の挨拶の仕方に物凄い魅力があって、施設を訪れた客は、その挨拶に出会うとメロメロになってしまうほどだという。たしかに知的障害者の中にそういう魅力を備えた人がいる。たまたまそのセミナーの席に都内の百貨店の社会貢献担当職員が数名いたので、私は尋ねてみた。「この知的障害の青年を、挨拶という仕事だけで、月に4万円（彼が作業によってもらっている工賃）を払う気があるか？」と。数名の百貨店の関係者がヒソヒソ話し合った結果を1人が発表した。「払います」。

### 3.仲間に加えるー共生社会づくりへのハードル

#### (1)要介護になったらサロンに入れてもらえない

要援護者も社会の仲間に加えてあげる、というのは、極めて当たり前の話だが、それが今の日本では実現していない。要介護になったら、老人クラブもふれあいサロンも趣味グループもあまり歓迎してくれない。デイサービスを利用するようになったら、もうサロンは卒業するより仕方がないのだ。

最近、ふれあいサロンが広がっている。その1つに伺ってマップ作りをした。まず参加者一人ひとりの自宅にピンク色の印をつける。次いで、この地区でデイサービスを利用している人に青色の印をつける。2つの色が重なっている人を探すと、たったの1人。どういうことなのか。仲間がデイサービスを利用するようになると、もうサロンは受け入れてくれないということなのだ。その理由を尋ねたら、「私たちは元気な人の集まりなの」。弱ったら施設に行ってちょうだい、ということなのだ。



今の社会は、要援護者と健常者による棲み分けができてしまっている。だから要援護者も仲間に入れるというのは、すぐにできそうでいて、なかなか実現しない奇妙な課題である。

学校では、いじめが絶えない。私たちは、「ふれあいをしよう」「共に生きよう」などと言いながら、もう一方では、ちょっと面倒な相手、自分たちと波長の合わない相手をすぐに排除し始める。そういう点で最近の人たちは、こらえ性がなくなっている。一方で、もっとハードルの高い「ふれあい」に挑んでいる人たちがいる。

## (2)わが子を殺した犯人もコミュニティに受け入れ

### <ニッケルマイン乱射事件の犯人の母親と被害者一家の交流>

アメリカで起きた「ニッケルマイン乱射事件」。この事件では、32歳の白人男性チャーリー・ロバーツが、アーミッシュの小学校で少女たちを次々と撃ち、5人が死亡、5人が負傷した。しかし地元のアーミッシュのコミュニティは即座に、自殺した犯人への赦しを表明し、犯人の葬儀にも参列し、犯人の両親を再びコミュニティに迎え入れた。

その信じ難い行動に感動が広がる一方で、一部では「そんな簡単に赦せるはずがない」「偽善だ」と、疑念や批判も生まれた。しかしこの経緯を調査した学者たち

がまとめた本「アーミッシュの赦し」（亜紀書房）を読むと、そんな単純な話でないことが分かってくる。

アーミッシュの人々は、「赦す」と宣言することで、その努力を自らに課した。絶え間なく湧き起こる怒りと闘い、加害者の両親とあえてふれあうことで、憎しみの連鎖を断ち、コミュニティの絆を守り、愛や許しという善の力によって犯人に報いろうとする。聖書の教えに厳格に従おうとする彼らの信仰心に基づく行動ではあるが、人として誰しも学べる要素が、そこにはある。

### **Terri Roberts, Mother Of Amish Shooting Perpetrator Cares For Her Son's Victims**



リリジョン紙

開され、その内容をもとに宗教関連のメディア「リリジョン」紙が記事を掲載したことで、加害者家族と被害者家族の驚くべき交流が明らかになったのである。（以下、同紙の記事「Terri Roberts, Mother Of Amish Shooting Perpetrator Cares For Her Son's Victims」より）

テリーさんはあの日、穏やかな10月の空の下、職場の同僚たちと屋外でランチを食べながら、事件現場へ急行する救急車のサイレンを聞いた。信仰心の篤いテリーさんは、いつもするように、救急車を待たれかのために祈りを唱えた。自分がだれのために祈っていたのかを知ったのは、夫からの電話で、息子の家に駆けつけてからだ。

はじめテリーさんは、息子は子どもたちを助けようとしてケガをしたのだと思った。「しかし息子は死んでいただけでなく、想像を絶する凶悪な犯罪の加害者だったのです」。元警官である夫のチャックさんは、タオルに埋めた顔を上げることが

その後の物語は、ほとんど知られることはなかった。しかしニッケルマイン周辺のコミュニティではひっそりと、淡々と、修復の努力が続けられていた。加害者の母親であるテリー・ロバーツさんが経験を語った音声は教会のウェブサイトで公開

できず、涙を拭き続けて皮膚がはがれてしまったという。

その夜、ニッケルマインから6マイル離れた夫妻の家を、ヘンリーさんという近所のアーミッシュの男性が訪れた。チャックさんは定年後、馬車で行かれない場所までアーミッシュの人を車で運ぶ仕事をしていていたが、もうアーミッシュの人々には二度と顔向けできないと言い、ヘンリーさんの顔を見ることができなかった。だがヘンリーさんは「私たちはあなたを憎みません」と1時間以上も慰め続け、ついにチャックさんは顔を上げて、「ありがとうございます」と口をきくことができた。

その後、被害者の両親を含むアーミッシュの人々がチャールズの葬儀に参列したり、夫妻の家を訪問するなどの交流を経て、事件から3ヶ月後、テリーさんとチャックさんは、被害者の家を訪問し始めた。テリーさんは生き残った被害者と母親たちを、自宅へお茶やランチに招待した。彼らのうち、特につらい思いをしていたのが、ロザンナ・キングちゃんの母親のメアリーさんだった。現在11歳のロザンナちゃんは重度の障害が残り、体を動かすことも話すことも食べることもできず、ロザンナちゃん自身、その変化にとっても苦しんでいたのだ。

それを知ったテリーさんは、「自分にも介護を手伝わせてもらえないか」と申し出る。毎週木曜、数時間をキング家で過ごすようになった。ロザンナちゃんの髪をとかし、風呂に入れ、シーツを交換し、聖書を読んであげる。

始めの頃はいつも、帰りの道中、テリーさんは自宅まで泣き通しだったという。「ああ神様、こんなことはとても続けられません…」とつぶやいていた。しかしそれでも彼女は、木曜日に来るたびに、キング家の扉をノックした。

これを受け入れている被害者家族の葛藤も相当なものだと想像されるが、ロザンナちゃんの父親は、リリジョン紙の取材にこう答えている。

「こんなことが出来るなんて、テリーは信じられないくらい強い女性だと思います。彼女が来ている時でもよく、ロザンナはつらがつらすぎてすごく泣いてしまうことがあり、そのたびに私たちは皆、なぜロザンナがこのような体になってしまったのかと、あの日起こったことを思い出さずにはいられないのです。もし私がテリーの立場になってもこんなに強くなれるだろうかと考えたら、ちょっと答えられないです」。

顔を合わせるのもつらい間柄なのだから離れていればいいものを、互いにこれほど苦しい思いをしてまでなぜ関わり合うのかと奇異に思う人もいるだろう。しかし彼らは、関係を断絶すれば、それぞれが抱える憎しみや罪悪感や事件当時のまま残ってしまうことを知っている。このような関わり合いから何が生まれるのかは時が経たなければ分からないが、それでも彼らは、その「何か」をしっかりと見据えているのだ。

### (3)息子を殺した犯人を隣人に迎え入れ

メアリー・ジョンソンという女性は、17年前に息子を殺した加害者を隣人として迎え入れ、同じアパートで暮らしている。加害男性の名前は、オーシェイ・イズリエルさん(34)。当時はマーロン・グリーンという名前で、16歳でギャングに所属し、麻薬もやっていた。あるパーティーで20歳の青年と口論になり、青年が何かを取り出そうとしたのを見て発砲し、胸に3発、倒れたところでさらに頭部に1発を撃ち込み、射殺した。殺された青年はメアリーさんの大事な一人息子、ラミアン・バードさんだった。

メアリーさんは怒り、加害少年とその母親を憎んだ。「事件はまるで、津波のようでした。ショック、不信感、憎しみ。怒り、憎しみ。非難、憎しみ。私は彼を獣だと思い、折に閉じ込めるべきだと思いました」。法廷では少年の母親と激しい口論になり、つかみかかろうとして職員に止められた。少年は第2級殺人で懲役25年半の刑に処されたが、メアリーさんからすればとても十分とは言えなかった。

その後10年以上、メアリーさんは少年を憎みながら日々を送るが、それで苦しんでいたのはメアリーさん自身だった。彼女は信仰心の篤いクリスチャンであり、キリスト教では「許し」を重視する。それも1つの理由だったが、それ以上の何かがあった。「人を憎み続ける心というのは、まるで癌のようなものなんです。内側からその人を食い尽くすのです」。そう気付いたメアリーさんは、どうにか、何とかして、少年



イズリエルさんとメアリーさん  
メアリーさんが立ち上げた「死から生へ」ホームページより

を許すことができないだろうかと考え込むようになる。

やがてメアリーさんは、少年が収容されているスティルウォーター刑務所に連絡し、「彼と会いたい」と願い出る。1度目は本人に拒絶されたが、もう一度申し入れると受け入れられた。仲介者が準備段階として双方と面談を重ねた後、いよいよメアリーさんは少年と直に向き合った。少年はもう30歳を過ぎ、少年ではなくなっていた。

この日のことを、後にメアリーさんはイズリエルさんにこう語っている。「私はあなたが、法廷で見かけた時のあなたと同じ心のままなのかどうか、知りたかったの。でもあなたはもう、あの時の16歳の少年ではなく、成長した一人の男性になっていた。私はあなたに、息子の思い出を語って聴かせたわね」。

面会が終わると、メアリーさんは感情が激しく高ぶり、泣き崩れた。戸惑いながら彼女の体を支えたのは、イズリエルさんだった。イズリエルさんは、とにかく自分のベストを尽くしてメアリーさんを両手で支えたという。自分の母親にするように、メアリーさんに腕を回した。

「あなたが部屋を出た後、私はこうつぶやいたわ。『私はたった今、息子を殺した男と抱き合ったんだわ』ってね」。

その後も、2人は何度も面会を重ね、対話を続けた。メアリーさんの話に耳を傾けるうち、イズリエルさんの中でただの被害者だったメアリーさんの息子は、1人の人間として形を成していった。他の受刑者たちの前に2人で出て体験を語ると、受刑者の多くは涙を流したという。

イズリエルさんが釈放された時、メアリーさんは自分が住むアパートの大家に願い出て、イズリエルさんを隣の部屋に受け入れてもらった。支援者とともに、イズリエルさんを再び地元を迎え入れるための「ホームカミング・パーティー」も開き、(現在は遠くに住む)イズリエルさんの母親・キャロリンさんも呼んだ。

メアリーさんは「死から生へ：癒しのために2人の母親が歩み寄るとき」という名前のサポートグループを創設した。暴力によって子どもを亡くした母親たちを支えるとともに、加害者家族との対話による癒しを促す活動で、加害者の母親も受け



入れる。メアリーさんとイズリエルさんはそれ以外でも様々な場所で、体験を語る活動をしている。「彼にとっては、私たちの物語と一緒に語ることは、簡単なことではないはずです。こうやって顔を突き合わせて一緒に座っているだけだって、彼にとっては簡単ではないと分かっています」。

彼が何日も顔を出さないと、隣からこんな声が飛んでくる。「ちょっと、私がどうしてるかちっとも見に来ないなんて、どうなってるの？ ゴミ出しをしてほしいかどうかさえ、聞いてくれないじゃない！」。

「こういうのが面白いと思うのは、まるで本物の母親との関係みたいだからだよ」とイズリエルさんが言うと、メアリーさんは、こう答えた。「私の血のつながった息子はもうここにいない。彼が卒業する姿を見ることもできない。でもあなたがいま大学に通っていて、私はあなたの卒業式を見ることができるのよ」。メアリーさんは、いつかイズリエルさんの結婚式に出ることも楽しみにしている。

といっても、メアリーさんは「許し」は彼のためではない、と強調する。許したことで彼が犯した罪が消えるわけではない、と。「許しは、加害者のためにすることではありません。自分のためです。相手に対する全ての怒りを解き放した時にはじめて、これから自分は元気になれると分かるのです」。

#### <参考記事>

- Love thy neighbor: Son's killer moves next door / CBS
- Gunshot took her son, but forgiveness finally came / Star Tribune
- Forgive, never forget, moms agree / Star Tribune
- When parents of killed, Killer meet / Chicago Sun-Times
- Forgiving her son's killer: 'Not an easy thing' / NPR

## 4. ミエミエでやってくれるなー福祉は水面下で

### (1) 助けてくれるのなら、いかにもそれらしくなく

街を車で走ると、老人ホームやデイサービスセンターなど、いかにも「福祉」をやっているなどと思われる施設が目に入る。福祉はこのように、私たちの目に焼き付

くほどに、ミエミエで行われている。しかしこれは、そのサービスを受ける人たちが望んでいることではない。

私たちはなぜ「助けて！」と言えないのかという問題を、本誌の他の箇所でも扱った。ある人は「自分の弱さをさらけ出さねばならないからだ」と言った。福祉のお世話になるということは、自分がそういう問題を抱えていることを明らかにしなければならぬし、そういう身を相手に晒さねばならない。いずれにしても、自分が弱っている、困っている実態を見られ、助けてもらわざるを得ないのだ。

だから私たちは、どうせ助けてくれるのなら、いかにもそれらしくなく、つまり水面下でやってほしいと願っている。だが、その気持ちが担い手にはわからない。担い手は、良いことだから、センターなどの看板を掲げて堂々とやる。両者の間に大きな溝があるのだ。

というわけで、人を大事にするということは、助けるという行為をなるべく水面下でやる、ということでもあるのだ。

## **(2) 私たちが望んでいるのはこんなデイサービスだ**

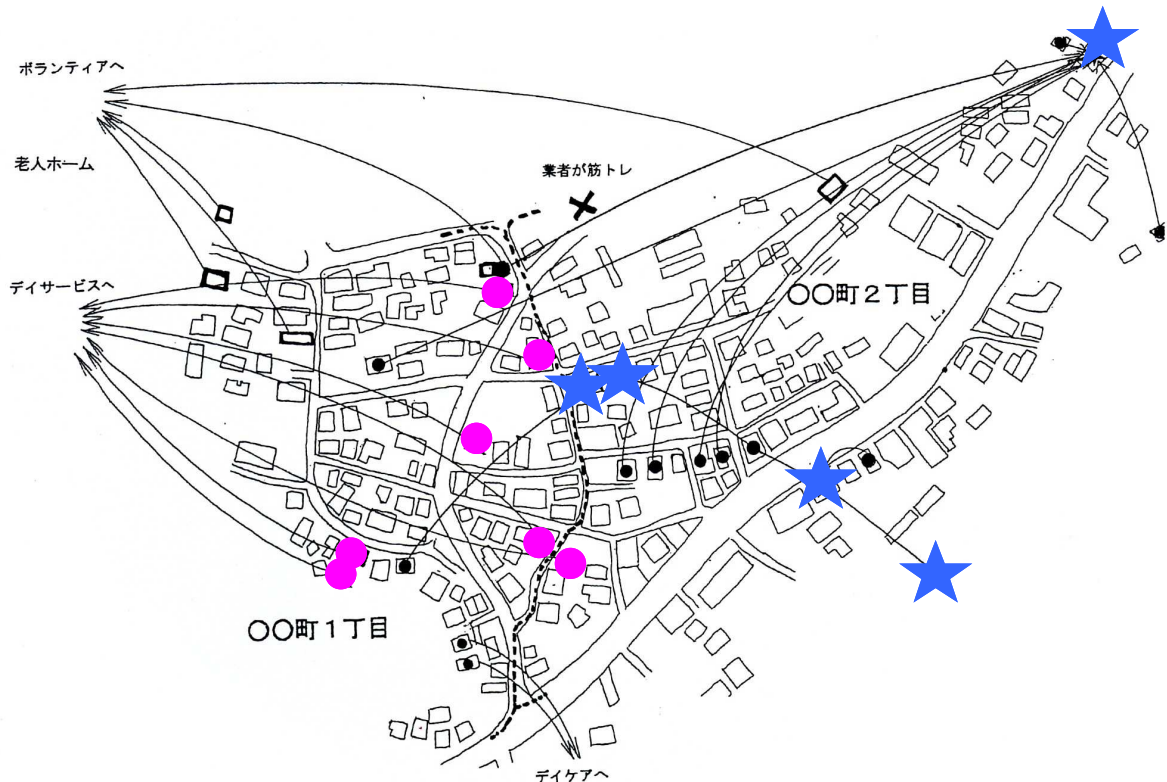
### **① デイサービス利用は1丁目だけ。なぜ？**

次のマップを見ていただきたい。道路を隔てて、左が1丁目、右が2丁目。小さな地区だから、2つの地区に特別な違いがあるわけではない。ところが、デイサービスを利用する人に印をつけてみたら、ほぼ全員が1丁目に住んでいた。「ボランティア」も1丁目だけ。近くの老人ホームに行っている。

では2丁目の人にはなぜデイサービスを利用しないのか。ここは沖縄県である。同県では、町のあちこちで「ゆんたく」が開かれている。小さなサロンのことだ。2丁目ではいくつかの「ゆんたく」が開かれていた。マップの右端のラーメン屋の「ゆんたく」に集まっている人だけでもこれだけいる。

要するに、2丁目では「ゆんたく」の場がデイサービスセンターの役割を果たしていると考えればいい。1丁目では「ボランティア」をしているような人が、2丁目では案外「ゆんたく」のホスト役になっているかもしれない。

誰だってそうだと思うが、デイサービスに行くよりも、みんなに交じって「ゆんたく」に参加している方がいいだろう。



### ② どうせならホンモノのカルチャースクールへ行きたい

新聞に「利用したいデイサービス」が取り上げられていた。簡単に言えば、そこで好きなお楽しみを選べるということだった。今日は陶芸をしたい、今日は踊りをしたい。「まるでカルチャーセンター」と記者はまとめていた。

しかし、それならなにもデイサービスセンターに行くまでもなく、地域には立派なカルチャーセンターがあるではないか。私ならそっちへ行きたいと思う。あとは要支援者のための移送サービスや介助人の付き添いなどをつけてくれればよい。実際に要支援程度で、デイサービスは利用せずに、カルチャーセンターに通っている人が必ずいるはずである。

### ③ 看板には「工務店」。じつはデイサービスセンター

あるデイサービスセンターでは、看板に「工務店」とある。利用者は作業着風の服を着て、「出勤」したらタイムカードを押す。「会社勤め」の気分になれる。「○

○さん、今日は保育園に××の修理に行ってくださいね」。本人がサービスを受けていることに気づかないような仕掛けが施してある。

#### ④銭湯で他人の衣服を畳む女性

知人が銭湯に行った。湯船でいい気持でいると、脱衣場の異変に気付いた。なんと私の服を勝手に畳んでいる女性がいる。慌てて脱衣場に戻ろうとしたら、番台のおばさんから声がかかった。「畳ませてあげなさいよ。この人、最近認知症になって、毎晩ここにやって来て、片っ端から服を畳んでいるの。畳むと気が休まるらしいから、みんな、やらせてあげているのよ。あんたもそうしなさいよ」。

この女性にとっては、銭湯がデイサービスセンターだった。番台のおばさんが所長というところか。

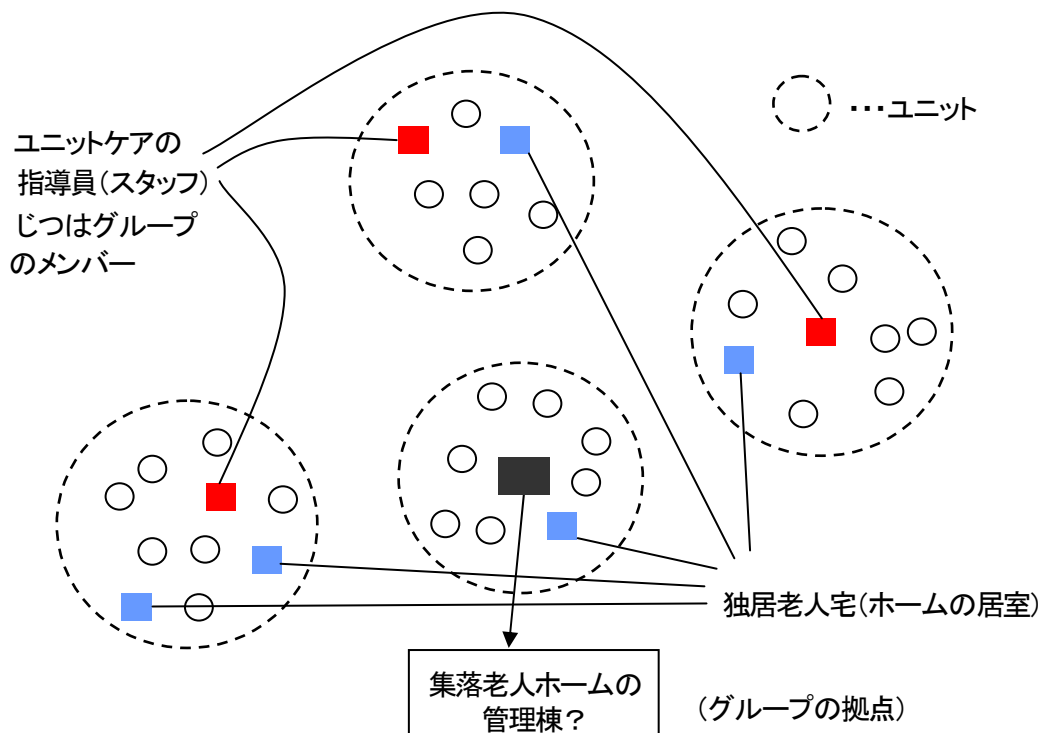
### (3)地域全体が「老人ホーム」？

次のマップは限界集落だが、そこで住民は意外なやり方で助け合っていた。有志グループが中央部の集会場でサロンを開いている。サロンを開いていない日は、メンバーはそれぞれ自分の地区に住んで、その地区内の要援護者の面倒を見ている。サロンが開かれるときは中央部の集会場に連れてくる。

いま老人ホームで広がっている「ユニットケア」を思い出した。大集団を、いくつかのユニットに分けて、それぞれに担当者が関わる。地域全体が一つの老人ホームだ！

この中の要援護の高齢者が、施設に入るのを嫌っていて、この地区で、自分の家で生きて生きていきたいと言っていた。彼女は、見えない老人ホームに入所していたとみることができる。

実質的には施設に入所していると思えばいい。各家が居室。関係者はいずれは、中心部でお泊りができるような機能を張り付けたいと言っていた。昼間は自宅にいて夜だけお泊りという手もある。



#### (4)社会生活の中で「福祉」も実現してしまえばいい

水面下で福祉をやってほしいというのは、どういうことなのか。福祉関係者は、対象者を見つけると、彼らが作り出した福祉のシステムの中にその人を組み入れてしまう。そうすることで、彼らは公機関から補助金なり委託料を受け取れる。その分、対象にされた人は、文字通りの「対象者」の位置に置かれ、システムの論理で動かされる。これではますます「自分らしい生活」から離されていく。

当人は、自分の生活の中で、自分に必要な福祉機能が果たされればいいと思っている。先程の認知症の女性にとっては、銭湯に行って服を畳むのが「デイ」なのだ。そうすると「福祉」というものは、機能は果たされるが、形は表面から消えていく。デイに行くより、「ゆんたく」に参加した方がいい、カルチャーセンターに行った方がいい、工務店で働く方がいい、ということになるのだ。

「見えない福祉」とは、福祉という働きを、形でなく働きと見て、その働きを当事者の普段の生活の中に潜り込ませるのだ。福祉という機能を一旦社会から抜き出して、純粹の福祉にするのが関係者のやっていることで、住民は反対に、純粹の形になった福祉を、働きだけにして、再び社会の中に戻していくことをめざしている。

## <第4章>

---

# 助け合いは、 両刀遣いで免許皆伝

この章では、「大事にし合い」を考える。「助け合い」である。じつはこれが難しい。関係者が何十年も、助け合いをしようと言っているのに助け合いはなかなか広まらないし深まらない。これには根本的な理由がある。それは何か。

## 1.助け合いはなぜ難しい？

### (1)ふれあいを続けていれば助け合いが始まる？

「ふれあい」は、「人間同士の大事にし合い」につながっていると考えられるが、私たちには誤解があるようだ。「ふれあい」を続けていれば、絆が強まり、いずれ「助け合い」に発展するだろうということである。

しかしこれは誤りというべきだ。ふれあいをいくら続けていても、そこから自然発生的に助け合いが始まるかと言えば、そうではない。むしろ逆に誰かが思い切って助け合いを仕掛ければ、それを契機として、絆が強まり、助け合いが広まっていくのだ。

社会は「ふれあい」流行り。どこでも「ふれあい」が行われているが、それはそれで終わってしまう。どうしてなのか。「ふれあい」は、ただ一緒にイベントなどをすればいいのだから簡単だが、「助け合い」は違う。互いの生活に踏み込み、見せたくない部分も見せなければならないし、そもそも助けを求められる人がいないのだ。

## (2) 1度助けてもらったなら「同僚」から「友達」へ格上げ

A子さんは、同じ職場の女性と同じ保育園に子どもを預けていた。早く退社した方が、相手の子どもも連れ帰るという約束をしていた。ある日、A子さんは、残業が長引き、10時頃になってようやく相手の家までたどり着いた。申し訳ない気持ちで一杯だったのに、相手は「〇〇ちゃんはお風呂に入れ、ご飯を食べさせ、もう寝かしてあるから、今晚はうちに泊めましょうよ。あなたもお腹がすいているでしょうから、食べていきなさいよ」と言ってくれたので、涙が出そうになったという。

A子さんはこう言っていた。「今までは彼女はただの同僚だったのですが、このことがあってから、私の『友達』になりました」。助け合いが行われた結果、絆が強まった。これからは、2人の間で助け合いは今までより容易になったはずだ。

## (3) 「助け合い」 —じつは「助け」だった

誰もが気軽に「助け合い」と言うが、その真意をよく聞いていくと、何のことはない、「助け」だったということがよくある。つまり表面では「助け合い」と言いながら、じつは「助けられ」はする気がない。自分が人を助けることを「助け合い」と言っているのだ。

ボランティアグループが言っている「助け合い」をよく聞いてみると、ボランティア活動、ないしは有償の家事援助サービスだったという場合が少なくない。

# 2.助けられてみると分かってくること

助け合いが広まらず、深まらないのは、私たちが助けてもらう体験が少なすぎるからかもしれない。一回その体験をすれば、見えてくることがある。本当の助け合いは、その体験をお互いが繰り返すことで、ようやく始まると考えたらどうか。

## (1) サービスを受けてみたら「カチンときた」

グループ名に「助け合い」を冠した有償の家事援助グループのリーダー、K子さ

んに聞いてみた。あなたはリーダーなのだし、グループの名前通りに、あなたも仲間にも助けてもらったことがあるかと聞いたら、あると言う。メンバーのA子さんに、自宅に来て、部屋をきれいにし、母の世話をしてくれるように頼んだ。

A子さんはK子さん宅に入るや、家の中を見回して、こう言ったという。「まあ、K子さんちって、結構、散らかってるのね」。散らかっているから頼んだのだし、何もそこまで言うことはないのではと、K子さんはカチンときた。

ところがK子さん、「カチンときた」時に思い出したことがある。自分も、人の家にサービスに入った時、同じようなことを言っていた。悪気はなかったが、いざ自分が同じことを言われたら「カチンときた」。これからは人の家に行った時、そういうことは決して言うまいと心に決めたという。

自分が相手に失礼なことを言ってもそのことに気付かなかったのが、同じことを言われて初めて気が付いた。だから、誰でもサービスをしている人は、自分もそのサービスを受ける立場、一度はなってみないと、このことを悟れないということだ。

## (2) 「大丈夫ですか？」と言われて気がついた

似たような体験を私もした。東京で旧知の福祉関係者に出会った。彼の頬はげっそりと落ちて、いかにも大病を患ったのでは思わせた。思わず「どうされたのですか」と聞いてしまった。本当に気になったので、聞いたわけだ。ところが相手は、いかにも不愉快そうな顔をして、何も言わずに立ち去ってしまった。

はて、私は何か失礼なことを言ったかしら。思い浮かばないままに、数十年が経過し、自分が年を重ねた。最近になって、講演先で受講生が私に近づいてきて「大丈夫ですか」と聞いた。私はビックリしてしまった。年はとつても、自分は十分に元気だと思っていたのだ。

そう言われると、今まで元気だったのに、突如、膝がぐんと崩れる感じがした。なるほど、あの時に不愉快な顔をされたのは、こういうことだったのかと気が付いた。嘘でもいいから、「お元気ですね。健康法は何ですか」ぐらいのことを言ってもらいたいものなのだ。言われる立場に立ってみて初めて、私が失礼なことを言っ



ていたのに気が付いた。このことに気づくのに、何十年もかかったとは！

### (3)両刀遣いで免許皆伝

「助け合い」というのは、一方に助ける人がいて、もう一方に助けられる人がいて、両者を合わせると「助け合い」だと考えている人もいるが、それは間違いだ。お互いが助ける側にも、助けられる側にもなるという関係が、本当の助け合いの関係である。あくまで、両刀遣いで免許皆伝なのだ。

ここで一つの自然発生のサロンを紹介しよう。石川県輪島市社会福祉協議会の山岸寿江さんが、輪島市で支え合いマップづくりをされていて発見した。以下、山岸さんの文章から。

～マップづくりの場で、気になる人は？ときいてみると、真っ先にあがったのが、「88歳の要介護で一人暮らしのHさん(女性)」でした。足が不自由でベッド生活、ヘルパーさんが一日4回来ている、受診は町の医者が往診にきてくれている、ということでした。聞いた瞬間、一人暮らしでヘルパーさんが入っているとあまり地域との関わりがないのかなあと勝手に思い込んだのですが、「このHさんに関わっている人はいないんですか？」と聴くと一斉に「Hさん家が集まり場になってるから、毎日みんな集まってるよ」との答えが返ってきました。集まっているメンバーは、この地区の一人暮らしの女性全員！92歳、84歳、83歳でした。また、雨の日になると、上の地区の75歳Yさんも遊びにくるとのこと、要介護の人の家がサロンの場となっていました。

集まっているメンバーの一人、92歳のOさんは、認知症がすすみ、服薬管理も必要になってきており、息子の毎日の電話での確認と近所の世話焼きさん、そして、83歳のNさんが見に行っていました。

後日、皆さんが集まっているところへおじゃまさせていただきました。Hさんはデイサービスから帰ってきたところで、他の



人達は帰ってくる時間を考えて集まったようでした。

「いつ頃から何がきっかけで、ここで集まっているんですか？」と聴くと「Hさん一人だから！様子みによるんや」「みな約束して来るわけじゃないけど、ここに来ればみんないるから」とのことでした。

Hさんは耳が遠く、「何はなしとるのかなんにも分からん」とニコニコ笑っていましたが、デイサービスの話になると「Oちゃん誰やデイサービス行けって言った？」「自分で言うてん！」「そりゃあ間違いない、じゃあ今度から一緒にいくかね」と会話に参加していました。

みなさん、とてもなごやかな雰囲気を楽しそうな表情が印象的でした。皆がおしゃべりをしている時、台所ではヘルパーさんが夕食の準備をしていました（ここまでが山岸さんの文章）。

こういう自然発生のサロンでは、誰が主催者か、誰がお客か、誰が担い手で誰が助けられる側なのか、さっぱりわからない。これが住民のやり方で、まさに各自が両刀遣いなのだ。

### 3.助け合いはしない「日本のおつき合い」

私たちは何かといえば「助け合いをしましょう」と言う。私もここ数十年、福祉の仕事に携わる中でこの言葉を使っていた。しかしなかなか助け合いが広がる気配はない。なぜなのか。じつは、日本人はまだ本気で助け合いをする気はないようなのだ。

#### (1)あなたの「おつき合い」の流儀は？

まず、あなたのおつき合いの流儀を確認するテストをやってみてほしい。以下の中で「私もそう思う」ものに○印を、「そうは思わない」に×印をつける。○がいくつ、ついたか。

- |   |                          |
|---|--------------------------|
| ①自分や自分の家族のことは隠しておきたい .....                        | <input type="checkbox"/> |
| ②自分のことがご近所で噂されるのはイヤ .....                         | <input type="checkbox"/> |
| ③人に助けを求めるのは苦手だ .....                              | <input type="checkbox"/> |
| ④人に迷惑をかけることだけは絶対にしたくない .....                      | <input type="checkbox"/> |
| ⑤人のことはなるべく詮索 <small>せんさく</small> しないようにしている ..... | <input type="checkbox"/> |
| ⑥誰かが認知症だと気づいても、誰にも言わないようにしている .....               | <input type="checkbox"/> |
| ⑦困っている人にはお節介と言われない程度に関わる .....                    | <input type="checkbox"/> |
| ⑧引きこもるのにも事情があるから、無理にこじあけるべきでない .....              | <input type="checkbox"/> |
| ⑨お互いのプライバシーは十分に尊重し合うべきだと思う .....                  | <input type="checkbox"/> |
| ⑩隣人とはあまり深入りせず、ほどほどのおつき合いを心がけている .....             | <input type="checkbox"/> |

## (2)要するに「助け合いはしたくない」ということ？

講演会で挙手をしてもらおうと、多くの人は10個のうち7つから9つに○が付く。それもそのはず、これらは日本人のおつき合いの常識なのだ。しかしこれでは助け合いはできない。○印が多い人は、「助け合いはしたくない」と言っているのと同じなのだ。

①から④までは、あなたが困った時にどうするか。これらに○がつけば、「私が困っても放っておいて」ということ。⑤から⑧までは、困っている人を見つけた時どうするか。これに○がつけば、結果的には「困っている人がいても放っておこう」というのと同じことになる。⑨と⑩はご近所づきあい。○がつけば「助け合いはやめよう」。

## (3)あなたが助けられる立場なら

まず「助けられる側」から見ると、以下の4項目が該当する。これに○がつけばどうなるのか、→印で示した。これでは周りも、助けの手を出せない。

①自分や自分の家族のことは隠しておきたい→それでは困り事が周りに気づかれ

ない。

- ②自分のことがご近所で噂されるのはイヤ→それでは困り事の情報に周りに伝わらない。
- ③人に助けを求めるのは苦手だ→「頼まれたら助ける」のが日本人。これでは手が出せない。
- ④人に迷惑をかけることだけは絶対にしたくない→それでは「助けて！」とは言えなくなる。

#### (4)あなたが助ける立場なら

今度は「助ける側」から見てみよう。関連しているのは、以下の4項目。

- ⑤人のことは詮索しないようにしている→詮索するほどの積極性がないと困り事は見えない。
- ⑥誰かが認知症と気付いても、だれにも言わない→それでは困り事の情報に伝わらない。
- ⑦困っている人にはお節介と言われぬ程度に関わる→そんなに消極的では、人は助けられない。
- ⑧引きこもるのにも事情があるから無理にこじあけるべきでない→だから、孤立死が生まれるのだ。

#### (5)あなたのご近所づき合いは？

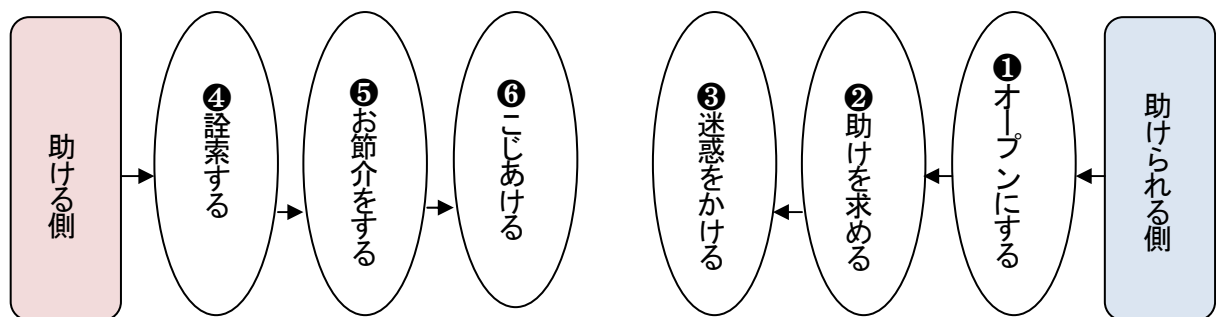
最後は、私たちのご近所づき合いのあり方。

- ⑨プライバシーは十分に尊重し合うべきだ→「あなたのことは放っておきます」ということ。
- ⑩隣人とは深入りせず、ほどほどのおつき合いを心がけている→困り事は言い合わない、つまり助け合いをしないご近所関係。

## 4.日本社会に助け合いを起こすには？

### (1)テストの結果を引っ繰り返したら

ではどうしたら助け合いの文化を育むことができるのか。冒頭のテストを引っ繰り返したのが下の図である。この中のどこから手を付けたらいいのか。住民に聞いてみたら、**①**オープンにする、を指摘する人が多い。これができれば、**②**のSOSを発したのと同じになる。すると、**④⑤⑥**の必要がなくなるというのだ。助け合いを始めるためには、まず要援護者がそのことをオープンにすることが必要だというわけである。



### (2)迷惑かけられる社会、お節介できる社会

助けを求めるには、「人に迷惑をかけてはならない」という縛りからも解放されなければならない。助けを求めれば、相手に迷惑がかかるのは仕方のないことだ。欧米やアジアの各国では、人に迷惑をかけることにそんなに神経質になっていないという。自分も人に迷惑をかけるのだから、人から迷惑をかけられても気にしないという考えなのだ。そのような「迷惑かけ合い社会」をどうやってつくるか。

担い手側では、詮索やお節介を排除する風土を変えていかねばならない。お節介ができる人がいれば、その人が臆せずお節介ができる社会作りも欠かせないのだ。

## <第5章>

# 当事者を主役に据える

この章では、「人を大事にする」の中の特に、要援護者を大事にすることを考える。そんなことは当たり前で、すでに実現していると思われるだろう。しかし現実には必ずしもそうとは言えない。全国で日々、関係者による福祉サービスが行われている。たしかに要援護者のためになされているのだが、当事者から見て、必ずしもそれらが要援護者を大事にしているとは言えないのである。

## 1. 推進者や担い手が主導する福祉

### (1) 「当事者主導」に重きが置かれていない現状

「人を大事にする」を福祉の面から考えたら、まず浮かぶのは「要援護者」。「要援護状態にある当事者」でもいい。その当事者をどう扱うのか。「どのように大事にするのか」という章で、あえて取り上げなかったことがある。当事者を主体に置き、その人の側から福祉やそのあり方を考えるということである。「大事にする」ことの中で最も大事なポイントだ。

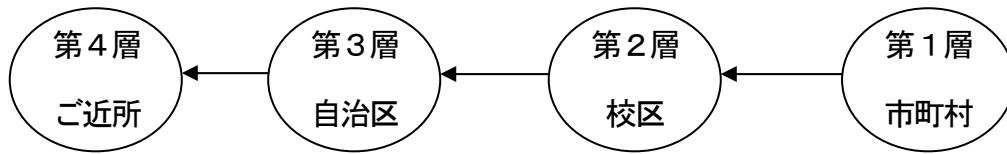
ところが、このことが福祉関係者の間では、あまり重きを置かれていない。とにかく、サービスを提供することが目的になっている感がある。どうしてこうなってしまうのか。

### (2) 地域は3つの層から成っている？

まず地域の実態についての簡単に説明すると、地域福祉では、地域は3つの層から成るとされている。第1層は市町村圏域で、数万から数十万世帯までである。次いで第2層は校区・または地区圏域で、数千世帯。そして第3層は自治区で、町内会

のある所。数百世帯だ。

ところが私は長年、全国でマップ作りに取り組んできた中で、地域には第4層があることを発見した。およそ50世帯の範囲で、私はここを「ご近所」と呼んでいる。



### (3)関係機関は第1層に陣取って、ここから指揮

関係機関はこの中の第1層の福祉センター辺りに拠点を置いて、ここから福祉ニーズを推測し、いくつかのサービスを考え、サービスが必要な人はこちらへどうぞと言っている。場合によっては住民を集めて、教育し、それを担ってもらう。いわゆるトップダウンというやり方だ。

その特徴を以下に並べてみた。

- ①担い手と受け手に峻別する。
- ②対象者を分ける。(障害の種類や要介護度で分けて、集める)
- ③一方的なサービス。(お返しは受け付けない)
- ④引き寄せる。(福祉センターまで来てください)
- ⑤集める。(会食会に集まれ。〇〇教室に集まれ)
- ⑥つくる。(サービスや活動をつくり、イベントをつくる)
- ⑦住民を指導する。(養成・研修し、組織をつくらせる)

読者がいずれどこかの福祉センターや施設で仕事をする時には、こういうやり方を取ることになる。慣れれば、それが当たり前になるだろう。

### (4)これが推進者主導・担い手主導

たしかにこのやり方だと、やり易い。分かりやすいし、手っ取り早いし、効率的だ。問題は、誰にとって「やり易い」のかという点である。それは当然、福祉の推進者や担い手にとってだろう。こういうやり方を、私は推進者主導・担い手主導と言っている。

一方で、このやり方は、福祉の対象になる当事者や、推進者の指導を受ける住民にとってはどうなのか。推進者や担い手の言うがまま、指導するがままに動くことになる。特に当事者は、「福祉の対象者」という立場に固定され、一方的に、ミエミエでサービスを受ける。自分の福祉ニーズを、いくつかの一般的なニーズに限定されて、しかもその内容について個別の対応を希望することもできない。しかもサービスの行われる場所まで出掛けなければならない場合もある。

## **(5)自分は利用したくないサービスを要援護者に提供していた**

こういう福祉は、住民からどんな評価を得ているかと言えば、サービスをつくったものの、そのサービスを求めてくる人が期待したほど多くないというのが関係者の悩みなのだ。

ちなみに福祉関係者に講演をした際、みなさんもいずれデイサービスを利用するかと尋ねたら、即座に、全員が「やだあ」と言って笑った。悪い冗談だと受け取られたようだった。

多数の施設を経営し、その理事長も務めていた、日本でも指折りの著名な福祉関係者の話。自身も高齢になり、だいぶ体が弱って来たので、部下の1人が言った。「先生、そろそろ先生がおつくりになったご自慢の老人ホームに入りましょうか」。別に冗談ではなく、まじめにそう進言したのだ。すると先生は突然、ワッと泣き出して、「あそこに入れられるのだけは勘弁してくれ」と懇願したという。進言した「部下」に直接聞いた話である。



## 2.「ご近所」だけは当事者が主導

### (1)およそ50世帯の「ご近所」があった

55ページの図を再度見ていただきたい。第4層の「ご近所」は50世帯程度と述べたが、昔の日本では国郡里という圏域設定がなされており、この中の「里」は50世帯だったそうである。日本人の基礎的な集落は50世帯から始まったのだ。「ご近所」は、特別な場所である。助け合いができるのは「顔が見える範囲」に限られるが、その範囲は、第4層の「ご近所」だけだ。言い換えれば50世帯程度が「顔が見える範囲」の限界であり、それより広い範囲では助け合いはできない。

私は全国で支え合いマップ作りをしている。ご近所の住民で住宅地図に囲み、要援護者にだれがどのように関わっているのか、線を引いていく。こうすると、そこでの助け合いの実態がきれいに見えてくる。この作業を20年間続けて来て、人々は50世帯という狭い範囲で助け合っていることを突き止めた。

### (2)ご近所に当事者がいて、隣人を頼りにしている

福祉の当事者は「ご近所」にいて、要援護状態のため、ご近所の外へ出るのは困難だ。だから自分のまわりの人たちの支援を受けながら、ここで自立生活をしている。ここが当事者の生活圏域であり、まずはご近所福祉を充実させてほしいと望んでいるのだ。

幸運なことに、ここに世話焼きさんがいる。足元の要援護者に関わり、困り事を解決してあげる天性の資質を持つ人で、多くの当事者が世話焼きさんを頼りにしている。世話焼きさんが活躍するのも、顔の見える範囲であるご近所だ。

### (3)しかし関係者は「ご近所」を認知していない

ところが国や県も含めて、福祉関係者はこの圏域を認知していない。この圏域の存在自体を把握しておらず、ここに目を向けていないということは、ここにいる当事者が見えないままに福祉を進めていることになる。市域の福祉センターなどにい

ながら、はるか離れた第4層の要援護者がどんな願いを持っているのか、見えるはずがないのだ。

当事者が見えなければ、彼らの福祉ニーズを把握することはできない。関係者からよく出される悩みは、ニーズが見えないということだ。もしご近所まで足を運べば、当事者のニーズは把握できるはずである。

当事者は、自分の問題を解決してもらいたくて、ニーズを発信している。しかしそれを受け取るためには、ご近所まで行かないと駄目だ。

#### (4)ご近所の助け合いを関係者のやり方と比較すると

ご近所の特徴は、他の圏域とは違った福祉のあり方が支配していることである。第1層から第3層までは、大体、関係者のやり方(つまり推進者主導・担い手主導)が支配している。ここでは、それを「業界流」としてみよう。

一方の「ご近所」では、住民独特のやり方が支配している。そのやり方を、私は「住民流」と呼んでいる。

ご近所での福祉の営みは「助け合い」だということは、すでに述べた。助け合いはご近所でのみ行われていると言ってもいい。それは(つまり住民流とは)どういうやり方なのか。業界流と対比させてみよう。

- ①助け合いは双方向。例えば「おすそ分け」には「お返し」がある。(業界流は一方的関係。住民流は「助け合い」で、業界流は「サービス」)
- ②大抵は1対1のやりとり。(業界流は相手をまとめてサービスを提供したりする)
- ③天性主義。生まれ持って世話焼きの資質のある人が活躍している。(人材登用では、業界流は研修したり、関係者による委嘱、または資格・肩書を大切にする)
- ④助け合いは、できるだけ生活の中で。(業界流はその目的のために集まり、組織作りをして、意図的に進める)
- ⑤相性の合う関係で助け合い。(業界流では、担い手が選んだ人を派遣する)
- ⑥助け合いは当事者主導。「あの人に頼みたい」という当事者の意向で始まる。(業界流は、推進者主導で関わる)

## 3.第1層と第4層のたたかい

### (1)地域では2種類の福祉が行われている

今、地域では2つの種類の福祉が行われている。1つは第1層の福祉センター辺りを拠点にした、推進者主導・担い手主導の、関係者を中心とした福祉。一言で言えば「サービス」である。

もう一方は、第4層のご近所での、当事者主導の、ご近所さん中心の「助け合い」。両者は相互に交流したり、協力し合うことなく、それぞれ別個に行われているのだ。

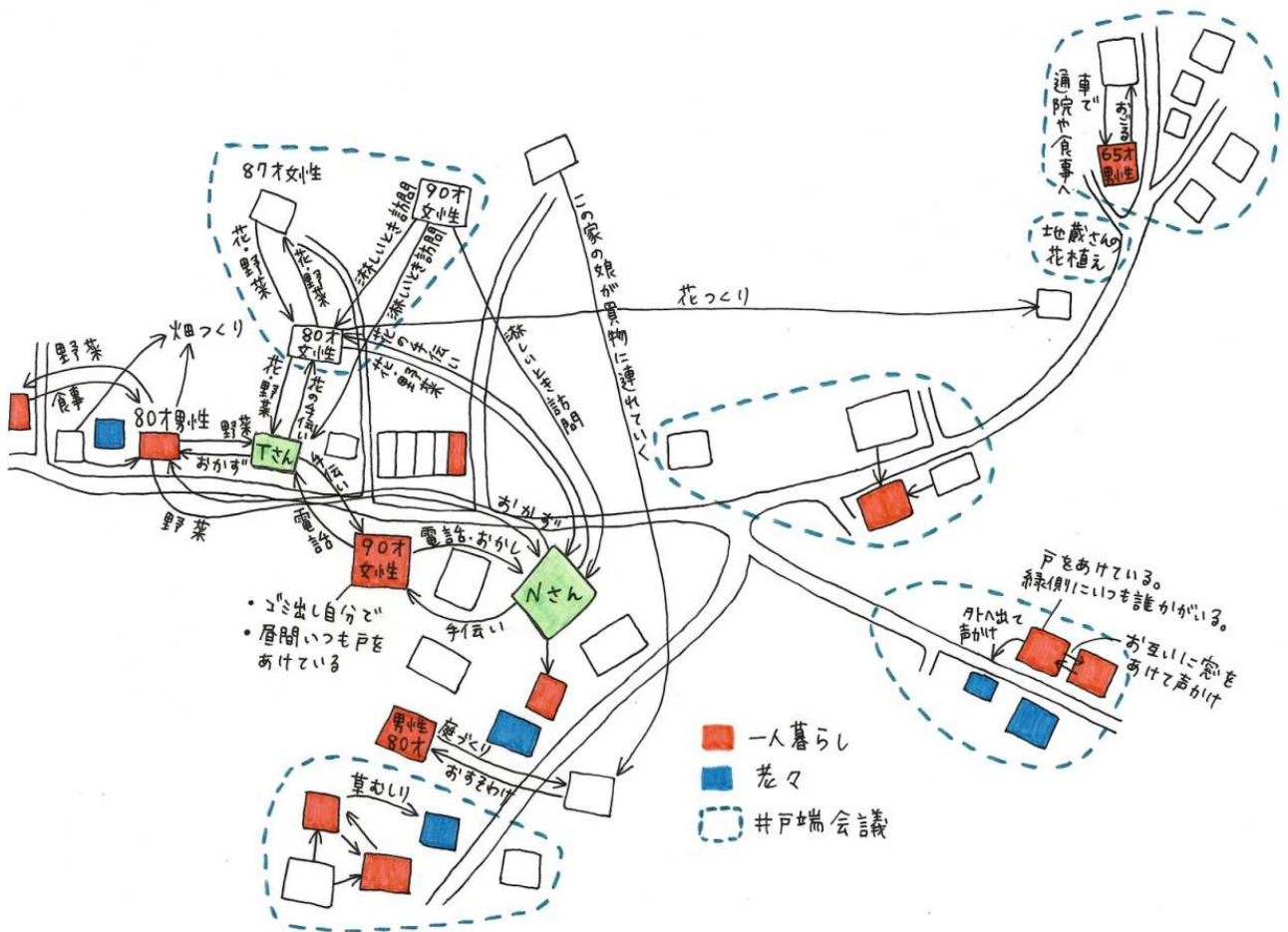
### (2)推進者は「ミエミエ福祉」住民は「水面下の福祉」

おそらく読者は、福祉と言えば第1層の関係者による福祉だけしかイメージできないと思うが、支え合いマップ作りをすると、たしかにご近所でも福祉(助け合い)は行われているのだ。

次のページのマップをご覧いただきたい。関係者による福祉(サービス)は、よく見える。福祉センターがあり、老人ホームがあり、デイサービスセンターがあり、ヘルパーが訪問しているから、よくわかる。

ところが住民のご近所でのやり方は、水面下の営みだから、見えにくい。住民には、福祉という人助けの営みは、ミエミエでやるものではないという暗黙のルールがあり、従って、表面では何もしていないように見せているのだ。

ところがマップを作ると、その営みがありありと見えてくる。



①この中の2人の■が世話焼きさん。また■が一人暮らしの人で、彼等もそれなりの福祉活動をしている。例えば右下の点線の中を見てほしい。一人暮らし同士で「お互いの窓を開けて声掛け」し合い、左の人は「外へ出て声掛け」、つまり周囲の人々に「私は今日は元気だよ」という合図を発している。

②人々のやり取りの線を見ていくと、大抵は双方向だということがわかる。誰かがおすそ分けを持ってきたら、お返しに畑でとれたものを届けるとか。

③送迎をしている人も2人いる。その場合もお返しが行われている。

④左上の点線の中にいる90歳の女性は、デイサービスから戻った後、お嫁さんが帰ってくるまでの間が寂しいと、周囲の複数の家を訪ねて行っている。当事者主導だ。

## 4.当事者が動き始めた

さて、これから福祉はどこへ向かうのだろうか。福とは要するに、要援護者を救済することである。そのあり方がどう変わっていくのか。残念ながら今はまだ、この点で、希望の持てる材料がない。前章で取り上げたように、公私の福祉機関は推進者主導、担い手主導に走っていて、それが変わる気配はない。なぜか。

### (1)文明の効率志向の支配から逃れられるか

私たちの行動を支配しているモノがある。文明という目に見えない圧力が、始終文明人と言われる私たちの背中を押し続けている。文明は私たちに、アメニティ(心地よさ)、効率的、やりやすい、手っ取り早い、すぐ効く、などの魅力を振りまき、社会を支配している。当然のごとく、福祉の世界も、同じやり方を取るようになった。

この圧力に抗することができるかといえば、それは無理かもしれない。私たちは既に文明的なやり方に完全に馴染んでいて、「効率的」で「やりやすい」仕組みを追求することが当たり前になっている。やりやすい福祉は、つまり推進者や担い手主導で進めることだと、すでに述べた。これを改める気は、国も自治体も、民間組織も、まったくないようである。

### (2)助け合い推進までも推進者主導で？

最近介護保険が行き詰って、国も、要支援の人から順に地域へ戻していき、住民の助け合いに委ねる方針に変えることにした。住民に「助け合い」をしてもらおうと期待するようになった。

しかしそのやり方は、従来通り、市の福祉センター辺りを拠点にして協議会を作り、各分野のリーダーが集まって、ニーズを推測し、サービスをつくり、担い手を養成し、そのサービスに要援護者が近寄ってくることを期待するというものだ。こういう推進者主導・担い手主導ではうまくいかないということが、そろそろ理解さ

れていいのではないか。

### **(3)人々の悩みの数だけグループが**

一方で、希望の持てる動きもないことはない。当事者の動きである。同じ問題を抱えた人たちがグループを作って助け合うという行動が、今や爆発的に広がっている。人々の悩みの数だけグループができていると言っても間違いではない。

その人たちの行動は日々進化している。分野も狭い福祉の世界に限らず、社会のさまざまな分野でグループが生まれている。被害者の家族の会が動いたおかげで、殺人事件の時効が廃止され、裁判で意見陳述する権利も勝ち取った。

認知症の本人の会が生まれ、当事者の立場から、その思いを公開の席で明らかにし、本当に必要な支援を求め始めた。「問題児」という扱いを受けてきた不登校の生徒も団結し、不登校は異常ではなく、今の学校に馴染まないのは自然な反応なのだと反論し、支援者とともに、いじめのない、自分たちの求める理想の学校を作った。

というように、同じ問題を抱えた者同士が寄り添い、ただ悩みを出し合うだけでなく、自分たちでできることは自分たちで解決し、その上で自力では解決できない部分を社会へ要求するようになった。

### **(4)一人ひとりの勇気ある行動がどこかでつながれば…**

かつて施設入所者たちで作るグループがデモを実施し、議員会館でこんな宣言を出した。「私たちの仲間で、施設に入所することを了承した人は一人もいない。即刻、全員、地域に帰すべきである」と。こういうことができるのは当事者だけであって、関係者からこういう声や行動も生まれてくる可能性は、これからもないのではないか。

本誌でこういう人物を紹介した。人も羨む超高級有料老人ホームに入ったのに、「私が私らしく生きていくのに不向きだから」と退所してしまった。戻るのはバリアだらけのマンションの自宅だったのだが。

このように、一人ひとりが「自分らしい生き方」を求めて果敢に行動を始めれば、私たちの前に立ちはだかっている厳しい壁も、少しずつ揺らぎ始めるかもしれない。

家族の再三にわたる説得にも耳を貸さずに、デイサービスを拒否して、畑づくりに精を出している女性を何人も知っている。「私は這ってでも畑をやりたい」と、手すりを付けた人だっている。

認知症で老人ホームに入所中の女性が、施設を抜け出して、地域で毎週開かれているふれあいサロンに通っている。

長年、地域の助け合いの中心になってきた世話焼きさんが施設に入所したために、地域の助け合いネットが崩壊してしまい、結局は本人が時々里帰りをして、要援護者の世話をしたり、世話焼きさんたちへの指導をしている。また地域に戻ろうかという話し合いもしているようだ。

こうした、当事者一人ひとりの勇気ある行動が全国に広がり、やがてつながり合うことで、その向こうに、当事者主導の福祉がどういうものなのかが、見えてくるのではないか。やはり最終的には、福祉は当事者が作るものなのだ。今のように他人が福祉をつくっている間は、革命的な変化は望めない。結局は他人事になってしまうからだ。

読者の皆さんも、こういう流れを頭に入れて、時代を読んでいけば、福祉の未来が見えてくるのではないか。

#### **(4)当事者革命はご近所から始まっている**

私は今、ご近所福祉を理論的に確立させ、全国に普及させることに全力を投入している。この小さなコミュニティで当事者は最も力を発揮できるし、当事者主導を実現できる。ここでなら住民の助け合いも容易だし、世話焼きさんという住民の中で最大の福祉力を持った人がご近所に集中している。こんなにいい条件はない。ここから、福祉は当事者を先導者として新しい展開を見せるはずなのだ。既に「ご近所福祉」を地域福祉の柱としている県や市町村も出てきている。

## <終章>

---

# 反文明への回帰

## (1)「福祉施設での虐待事件」の不可解さ

本書は、「人間を大事にする」という角度から福祉を考えることにした。

しかし振り返ってみれば、福祉施設で起き続けている虐待事件の中身を見ると、福祉の第一線で働いている人たちは、果たして「人間を大事にする」ということが分かっているのか疑問に思うような事例ばかりである。一応研修は受けただろうし、それ以降も日常的に研修が行われている。事件が起きればまた研修である。

老人ホームの職員が、認知症の女性の顔を何度も平手で殴ったり、下半身を裸にして、それを写真に撮り、ご丁寧にブログで流したりと、やりたい放題である。その光景を想像してみると、福祉職員という以前に、人間として失格ではないかとさえ言いたくなるだろう。

事態は皆さんが推測しているよりも深刻だ。ある施設職員から直接聞いた話だが、家で妻と諍いをしてストレスがたまってきたまま出勤すると、まず「居室を一回りして、入所者を叱ってこよう」。

## (2)施設で一番危険な人物は職員？

老人ホームだけではない。東京都は障害関連の施設での職員による虐待があまりに頻発するので、すべての施設にオンブズマンを派遣することにした。施設で監視が必要な、つまり一番危険な人物が職員だったというのだから、笑えない話である。

その障害関連施設の全国連絡会がセミナーを開催し、私も分科会の1つを担当したが、「障害児を職員の暴力から防ぐには」という分科会も開かれていた。障害者の自立支援施設や養護施設でも同様の事件が起きている。

こうなると、特定の人間というよりは、人間そのものが信用できない、と思わざ



るを得ない。だれでも施設職員になれば、そういうことをしてしまう可能性があるということである。

### (3)「絶対的な権力は絶対的に腐敗する」

ローマ時代に既に、哲学者がこのからくりを説明してくれている。「絶対的な権力は、絶対的に腐敗する」。この一言に尽きる。密室で、超強者と超弱者を対峙させれば、超強者は横暴に振る舞うようになるということである。

福祉施設に限らない。学校も危険地帯である。知り合いの教師が言っていたことだが、「教師は教員室ではおとなしくしているが、教室に入れば自分の天下だ」と。「学級王国」と言うのだそうな。

そう言えば、教師が生徒をいじめる事件が起きていて、そのいじめ方が、老人ホームのそれに似ている。

そして今、家庭が極めて危険な場になっている。それでも児童相談所の専門官は「家庭第一」の主義を変えないつもりのようなのだ。どんな危険な親でも、実の親が育てるのがベストだと。虐待を受けていた子が、テレビで言っていた。家庭内というのは、親が味方でなくなった時、助けてくれる人がだれもない恐ろしい場所だと。

私たちは、福祉施設の職員は入所者を、学校の先生は生徒を、そして親は子供を大事にするはずだという、信念というよりは願望に支配されている。こうした密室的な弱者と強者の組み合わせは、その構図上、本来危険をはらんだ関係であることを認識し、本気で対策をとっていく必要がある。

### (3)虐待やいじめは文明が生み出した副作用

政治の世界では、こういうおかしいことが起きないように、チェックアンドバランスを確立し、どこかが横暴にならないようにしている。政治の世界では、人間は放っておけば悪いことをするという冷めた見方から制度を作っている。

では、福祉施設や学校や家庭はどうなのか。施設や学校というあり方は、文明の所産である。効率をめざして、同じ対象者ばかりをひとまとめにし、そこに職員を

担い手として配置する。超強者と超弱者を密室で対峙させる結果となった。

こういうあり方は確かに効率的だが、人間の自然に反する。教師と子どもの関係だけでなく、同年代たちの子供がたった一人の教師の下、数十名が一つの教室に詰め込まれているため、ストレスに満ちた弱肉強食の世界ができ、いじめが始まる。制止する外部の人はいない。という意味では、いじめは絶対になくならない。

#### **(4)昔の長屋はチェックアンドバランスの仕組みが**

家庭はどうか。これまた密室で、超強者の親と超弱者の子供が狭い家の中で対峙している。これが昔の長屋だと、どうか。完全に独立した形の家庭は存在しなかった。子供を虐待しようものなら、長屋のおかみさんたちが黙っていないし、一方で支援の手も伸ばしてくれる。長屋自体がチェックアンドバランスの仕組みそのものなのだ。大家族制度も、似たような機能を果たしていた。

文明は、そういう生活文化があったのを、その意義もわからぬままに、ことごとく崩してしまい、核家族という極めて危険な形態だけを残してしまった。そして困ったことがあれば、専門の窓口を訪ればいいと。

そういえば、江戸の研究者である田中優子さんは、若い頃長屋に住んでいたという。そこでは、隣と隔てるのは襖一枚だけ。プライバシーはゼロだったが、息苦しさは全く感じなかったと述懐している。そして長屋は、子育て支援センターや老人福祉センター、保育園などの多数の福祉的機能を果たしてきたとも言っている。

最近、敢えて面倒な共同生活や助け合いを選択する人たちが出てきている。同居の代わりに親子が近居して、親が子育てを手伝い、子どもが親の困り事を解決したりするという生活スタイルも広がっている。また、不登校の生徒たちのフリースクールができているが、そこでいじめのない学校づくりを目指している。内容を見ると、今の学校と根本的に異なっている。

共通するのは、反文明だ。文明のめざす効率性、快適さ、手っ取り早さ、便利さといったものよりも、人間らしさや豊かな生き方を追求したところに、いじめも虐待も暴力もない世界が生まれ始めている。